
閃光のアームエルフ

小鳥遊葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のアームエルフ

【Nコード】

N5646P

【作者名】

小鳥遊葵

【あらすじ】

西暦2020年。人類は2005年に突如発生した「時の冬」と呼ばれる災害からようやく立ち直り始めていた。だが「時の冬」を境に「ヨトウン」と呼ばれる巨大な生命体が出現し、人類は苦しい時代へと突入する。それまでの全ての攻撃が効かないこの生命体は、人類を絶滅へと追いやるに十分な存在であった。

来るべき大災害から人類を守るために造られた要塞都市「京市」に住む芳永真琴は、ある日奇妙な頭痛に苦しむ。そんな真琴を待っていたのは、巨大な生命体と都市に鳴り響く警報であった――。

episode? プロローグ(前書き)

西暦2020年。人類は2005年に突如発生した「時の冬」と呼ばれる災害からようやく立ち直りを見せ始めていた。

だが「時の冬」を境に「ヨトウン」と呼ばれる巨大な生命体が出現し、人類は苦しい時代へと突入する。

来るべき大災害から人類を守るために造られた要塞都市「京市」に住む芳永真琴は、ある日奇妙な胸騒ぎを覚える。心配する真琴を待っていたのは、巨大な生命体と都市に鳴り響く警報であつた――。

漢字間違い等のミスを見つけた場合、ご指摘いただけたら幸いです。その他、感想なども宜しく願います

episode? プロローグ

プロローグ

アームエルフTYPE-01>アースガルス<

>i22013—2293<

窓から強い光が射し、部屋中を薄く照らす。春先の空気は人間にとってちょうどいいやわらかさを保っており、この空間を包み込んでいた。

芳永真琴が目を覚ましたのは、甲高く、痛いほど耳に響く“騒音”の中だった。

時間は午前6時半。太陽が空に昇り始めたばかりの、まだ人もそれほど歩いていない時間帯だ。普段は聴こえないほどの小さな小鳥のさえずりが、窓越しに聴こえるタイミングである。どちらかというと、平穏で、騒ぎとは程遠い瞬間と言えるだろう。

それなのに、真琴の部屋を支配していたのは自室一杯に響き渡る騒音だけである。まるでなにか物事を急かすような、休みさえ与えてくれなさそうな音撃だった。うっとおしくて仕方がない。

枕に顔を埋めていたため目標の姿は見えない。だがいつもどおりの所定の位置にいることは確かだった。苛立ちを抱きながら、無言で音を放っている物体——目覚まし時計の頭を叩く。

だが手の平は時計に触れることなく、時計を置いている、台を『バンツ』と叩いただけだった。

安物の木材を叩く、短くて軽い音だ。

「・・・・・・・・」

素直に起き上がればいいものを、真琴は顔を埋めたまま、闇雲に時計を探そうとする。軽く広げた掌を机の上で滑らせた。

なにかに触れた。冷たい金属質の固体が指先に触る。

だが、目覚まし時計は『ガシャンッ』という落下音と共に落ちた。丁度ベッドの隣、真琴の頭と平行に位置する床の上に。

一種の気まずさと、鳴り響く音。『ジリリリリリリ！』と、まるで漫画のテンプレートのような音色が、ベッドの横から真琴を襲っている。

どんどん面倒臭い方向へと物事が進んでいる。

……このまま二度寝を決め込もうか？ どうせうるさい騒音は何時か止まる。……だけど、どうにも起きれそうに無い気がする。今のこの状況では、多分自分は起きれない。

けど、眠い。

ささやかなうめき声を上げて寝返りを打つ。間接が自然にほぐされ、瞬間の癒し、もとい二度寝へと真琴を誘う。

しかし、カーテンの隙間から強い日光が室内に届き、寝返りを打った真琴の顔を白に照らしあげた。今まで完全な暗闇であった視界が、不気味なオーロラで不規則に照らされた。

それが妙に気に障り、眠気を吹き飛ばしてしまった。

「——ッ、ハア……」

足元の時計を元の位置に戻し、目覚まし音を止める。

体の半分はまだベッドに入ったままで、ベッドから抜け出したいなさそうだった。

真琴の住む京市^{みやこし}という街は、良くも悪くも近代的な町並みであった。

無機質なコンクリート壁の建物が一定感覚で律儀に並び、どの建物も外装はほとんど一緒で、これといった違いはなにも無い。『入居者募集』とか『空き部屋あります』といった看板が装飾にも見えなくなるほどである。一応、細い木々が建物の間に存在しているが、この風景の中では心許無い。枝で休んでいた小鳥が痩せ細って見える。

そういつた風景が全ての都市だった。同じような建物が並び、同じ色が支配する。他の“なにか”は一切拒む――。

真琴はそんな風景の中を、自宅から数分にあるバス停から眺めていた。備え付けられたプラスチック製の椅子に腰掛け、辺りの風景を見上げている。特別な意味があるわけではない。学校に向かうバスがここに停まる、ということだけだった。

人間不思議なもので、こういう無機質な空間が最初は『気持ち悪い』と思っても、最後は慣れてくるものなのである。緑やら自然が必要と言われているが、結局は慣れということをしみじみ感じさせられてしまう。

現に、このコンクリート色のこの街を真琴は『気持ち悪い』とは思わなかった。

京市がこういう構造なのには、理由がある。

京市は神奈川県、相模湾に面している都市だ。21世紀に入つて出来た新しい都市で、平塚市に茅ヶ崎市と大磯町、そして寒川町の半分を市の面積としていた。街の半分は海上に存在していて、ちょうど陸地に住宅街、海上に商業地がある。

特徴的なのは、無機質で巨大な壁である。京市の住宅街に当たる陸地、それを中世の城郭都市と同じ様に巨大な壁で囲んでいるのだ。その壁の高さは実に50mを超え、七階建てのビルに相当する。それとは違い、海上の商業地は建物以外の遮蔽物はほとんど無く、陸地、海上で見せる表情がまったく異なっていたのだ。また、どちらのエリアにも『シェルター』と呼ばれる避難施設が数百箇所存在しており、災害時にはそこに逃げ込むようになっていた。普通の街では見られない、異常なまでの設備だ。

それには、2005年に起こった時の冬と呼ばれる災害が関係している。世界の総人口の約1/3、25億人が死んだとされ、世界経済を崩壊寸前にまで導いた超大規模な災害だ。それまでの自然

的現象を全く無視したこの災害は、人々の心に消せることの無い暗闇を残した。

生きることが当たり前の時間を、文字通り変えて見せた――。時の冬 という名称はここから来ている言われている。

京市はそういった災害から人を守る、『要塞都市』の第一号として開発されたのだ。一見、高い胸壁が街を囲むだけにも見えるが、街の住民全てを収容しても有り余るような空間が地下には存在している。地下を守る地表も当然の如く強化されており、おそらくは絨毯爆撃にも耐えられるであろう凄まじい強度を誇る。

日本どころか、世界の中で災害の被害を受けにくい都市、そう言える。現に、開発から数年が経っても移住者は増えるばかりだ。

最も 時の冬 を境に、人類の人口を一瞬にして減らすほどの災害は起こっていないのだが――。それとは別の、また一つ違った問題が存在していた。

向かってくる、二つの人影に気づいた真琴がおもむろに立ち上がる。軽く挨拶をしたところで、自然と会話が始まった。

バスが来るまで、後数分ほど時間があった。

episode? 1・大陸蹂躪?

1・大陸蹂躪

五月十三日・午後七時二十一分 中華人民共和國直轄市重慶

黒煙で埋もれた空が渦を描きながら低く唸っている。灰色一色の空は薄灰、濃灰と色を変え、まるで絵画のような複雑さであった。地上から昇る黒煙が、空と地上を繋ぐ塔のようにも見える。

まぎれもなくそこは地球上であつたが、それまでの戦闘で廃墟と化しかけているこの地は“地獄”といった表現のほうが正しく思えた。

中華人民共和国の都市、重慶市は戦闘でかなりの損害を受けていた。人民解放軍は主力戦車である98式戦車を70両以上失い、それに連なる兵装の2/3を損失。航空戦力はほぼ全滅したと言え、現在は残存の車両と歩兵によって最後の抵抗を行っていた。戦闘で各部隊の指揮系統はほぼ壊滅しており、敵から逃げるように防衛ラインは引き下がっている。足止めで死亡した兵士の数は数千人を超え、拳銃の果てに逃走した兵士の数は数百人規模にも上っていた。

ビルとビルの隙間、大通りに形成された黒煙の壁から滲み出るように、なにかがその姿を現す。空間その物がその姿を避けたように、一瞬、辺りの光景が湾曲したようにも見えた。

人の形を真似たような姿。胴体にあたるであろう部分は極端に短く、それに比例して両腕、両脚は不気味なほどに長い。脚にあたる部分は支えることに支障が出そうなほど細く、足首から下に足は無かった。地面からは少し浮いているようで、足の真下の道路は押し

付けられるように陥没している。

腕は人間のそれとは程遠く、肩から六本の触手のような物が生えている。その触手が絡み合うように一本の腕を成型しており、触手の先端がウネウネと揺れていた。

そして、まるで全身が影であると勘違いしてしまうほどに深い黒で体全体が黒一色の特異な姿は、恐怖以上に不気味さを覚えた。

ヨトウン——数十年前に突如地上に現れた、巨大な生命体の名称だった。時の冬 後に姿を現し、現在世界中でその姿が確認されている。

それまでの人類の兵器では傷一つ付けることが出来ず、各国の軍隊がその対処に絶望している、まさしく神話の巨人のような存在であつた。

街道に並んだ戦車が、体を吹き飛ばしかねないほどの砲撃を三連射、行う。普通の兵器、あるいは生物では、その砲弾の衝撃に耐えることは出来ない。

砲身から激発された砲弾が、一直線に飛んでいく。周りの空気を切り裂くように銃弾が突き進んで行き、ヨトウンのその胴体に勢いよく突き刺さる。ように見えた。

砲弾とヨトウンの間に、オーロラのような発光現象が生じる。鈍く輝く光は多彩な色を放ち、戦車から放たれた砲弾に触れた。

ヨトウンに飛来した砲弾が、残り数センチのところで突然弾け飛んだ。まるで、見えない壁に弾き飛ばされたように。

攻撃はさらに続く。戦車の砲撃はもとより、歩兵によるロケット弾の発射。生存していた攻撃ヘリコプターからのミサイル攻撃も届いた。

その全てが、後一步のところで弾かれる。

実際に、そこには壁があるのだ。

ヨトウンと呼ばれるこの生命体には 重力指向変化現象 という物理現象を発現させる機関が存在している。これは自身や表面の重力を意図的に操作する物で、言い換えれば 重力制御装置 と似た

ようなものであった。

表面付近にあるこの指向性の重力は、向かってくる対象物を捻り潰すよりも先に弾き飛ばす。それにより物体による攻撃を完全にシヤットアウトし、本体その物を守っている。いわゆる、指向重力による防壁だ。

また、ヨトウンは自身に降りかかる重力をこの機関によって無くすことで、その形態を保っている。この機関を駆使すれば、空中に浮遊することも可能だ。

向かってくる砲弾を弾いたり、立っている（実際には僅かに浮いているのだが）道路が陥没したのは、この機関が働いているからだ。

——つまり、この機関さえ破壊すればヨトウンは自身を支えることが出来なくなり、崩壊する。また防壁の効力もなくなることから、容易に倒すことが出来るのだ。

だが、人類の持つ兵器でこの防壁を突破することはほぼ不可能に近い。先ほどの砲弾と同じ様に弾き飛ばされてしまうのだ。

人型ヨトウンがその巨大な右腕高々と振り上げ、前方にいた戦車に叩きつける。金属の軋む音と共に道路全体が爆発したように揺れ、半壊したビルから白い破片が飛び散る。あまりの勢いに車体底部が放射線状に広がるように押し潰された。

おそらく、人類の兵器としては最高の防御力を持つであろうその主力戦車は、逃げることにすままならず叩き潰された。

防壁になにかが当たり、弾かれるように飛び散る。兵士の持つ対戦車ロケット——。

兵士の一人がビルの陰から対戦車ミサイルを撃つたのだ。そして、綺麗な弾道を描いたミサイルは見えない防壁に接触し、爆発することも無く崩壊。

兵士が怯えるようにビルの陰に逃げ、ヨトウンから離れようとした。

頭に位置する部分が赤くきらめき、対戦車ミサイルを持った兵士

を睨む。

左腕が風を切るように払われ、隠れていたビルごと兵士は吹き飛ばされた。

鉄骨のひしゃげる音とコンクリートが割れる音が鳴り響き、粉塵が辺り一帯を包み込む。攻撃の余波で辺り一体の建造物も吹き飛んだ。

ヨトウンが満足げに、“胸”を反る。その後、眺めるように重慶を見渡し、ゆっくりと歩き出した。

クリクリと動くその頭部は、まるで子供の拳動だった。

上空からみた重慶は、辺り一面火の海となっていた。コンクリートで出来たはずの建造物は粘土細工のように全て崩壊しており、逆に木造建築は火に焼かれ、ただの墨と化している。

本来はまっすぐ伸びているはずの道路が、あらぬ方向に波打ち、寸断されている。倒壊した建物で瓦礫の山と化している地域もあった。

おおそよ、人が住んでいたとは思えないほどの被害。空は炎で赤く照らされ、雲は黒く染まっていた。辺りに飛行する物体は見えず、また、空から見渡す限りでも地上に生物が存在しているように見えない。

ヨトウンだけは、その荒廃とした都市で悠然と歩いていた。頭や腕を嬉々として揺らし、まるで遊園地に来た子供のように都市を見渡している。半壊した建物を踏み倒し、ビルをなぎ倒す。どこに向かっているのかは分からないが、少なくとも破壊を繰り返していることだけは分かる。

不意に、ヨトウンが空を見上げた。なにかに気づいたような雰囲気、真つ赤に染まった空を見る。

数千m先。そこに、黒点のような物が飛んでいた。高度は約800mといったところだろうか、それは次第に大きくなっていき、

やがて一つのシルエットを空に描いた。

黒。それがその物体の印象だ。直線と曲線がシンプルに合わさり、その線を緩やかに端まで伸ばしている。両端から伸びたソレは刃物のような鋭さを見せつけ、まるで巨大な刃物のようにも見えた。

飛行機だ、それも、かなり巨大な。下部の膨らんだ形状から輸送機のような印象も与えたが、現在各国で運用されているどの輸送機にもその姿は当てはまらない。

そして、一般の輸送機に比べはるかに巨大だった。その全幅は100mに届きそうな長さで、胴体は既存の機体よりも圧倒的なスケールだ。翼に付いている円形のターボファンエンジン四基は旅客機であるボーイング747の物よりも厳つい印象で、轟々とエンジン音を響かせている。

ヨトウンが輸送機を注視し、その歩みを止めた。頭部の赤い発光体が不気味に動き、一定の間隔で発光する。

輸送機の胴体——台形状のその部分がゆっくりと左右に割れて、中から巨大な機械が姿を現す。バランスを崩した輸送機が一瞬ユラリと傾き、懸命に姿勢を立て直そうとする。その巨大な翼が軋む音が聞こえるようであった。

機械を支えていた巨大なアームが、一斉に機械を手放した。

塊が、重慶の街——ヨトウンの目の前に落下した。

衝撃。

まるで、空から巨大な質量弾が降ってきたようだった。落下で生じた爆音と衝撃が、崩壊した重慶を襲う。すでに大部分の建物が崩壊しており、ヨトウンがゆっくりと行進する大通りに落下したそれは、コンクリート片を派手に吹き飛ばせ、周囲をコンクリートの白煙で充満させた。

あまりに強い衝撃だった。人民軍兵士の遺体は浮き上がり、既に大破していた戦車の装甲がグラグラと動き出す。離れた位置に存在していた野戦病院——前線司令部にはその衝撃が伝わらなかったが、砲撃音と間違えかねないほどの爆音が数秒遅れで届いた。

驚いたのは人民軍の残存兵だけではない。ヨトウンでさえ、その落下物を見る。巨大な輸送機から、突然なにかが投下されたのだ。いつそう警戒を強める。

白煙の霧が少しずつ薄れ、降ってきた“なにか”のシルエットをぼんやりと映し出す。それが妙に神秘的で、奇妙な沈黙が戦場を支配した。息をすることすらままならない雰囲気人が襲う。

ヨトウンに立ち向かうかのごとく落下してきたなにかは、静まっただま動く気配を見せない。霧に覆われ、その全貌はハッキリしないが、輸送機よりもはるかに複雑な形状で、対ヨトウン兵器なのは明らかだった。

やがて、ゆつくりと息をするかのように“立ち上がった”。

滑らかに締まる、直線的な“上腕”。対照的に、“下腕”は“拳”に近づくことに太くなっていき、細く、折れ曲がってしまいそうなほどの“胴体”は、ヨトウンのそれとは違った機械的な強靱さが伺い知れた。

“太もも”は“腕”と同じく巨大で引き締まっていたが、刺々しい装甲は腕の物よりも攻撃的なデザインだ。“膝”から下は、支えられているのも怪しいくらい細く、曲線を描き、太ももの半分の太さにも満たなかった。“頭部”はまるで戦闘機がそのまま乗り上げたようにも見える。エア・インテークなのだろうか、頭部の左右から突き出した四角形状の部品は他の部位に比べ無骨なようにも思えた。キャノピーに相当するであろう、中心の半円状のクリアパーツは水色に光っている。

そして、特徴的な装甲。頭部や胴体、腕、脚を覆う装甲はガラスのように煌いており、装甲の芯は白い靄で濁っているようにも見えた。戦車や戦闘機の装甲とは全く印象が異なるその装甲は、後から着色したのか、はたまた自然にその色なのか綺麗な青色で染め上げられている。

人型だった。それもヨトウンと同スケール、40mの、付近のビルと同程度の大きさの巨人だった。

人間を40mにまで巨大化させ、鎧を纏わせたらこうなるのかも知れない。だが、そのあまりにも不恰好な姿はとも人間には見えなかった。むしろ人間の骨格を真似たといったほうがしっくりくる。それほど、この巨人の立ち姿は人間とはかけ離れていた。

ヨトウンが“首を傾げ”、巨人を観察する。敵か、あるいは仲間なのか判別しているのだろう。考えているのか、頭をグリグリ動かしながら、巨人から目を離さない。

一方の巨人も、ヨトウンを観察しているように全く動かなかった。キヤノピー部分と思われるところだけが光り、その場から動かない。動きを止めたヨトウンが、右腕の触手を広げる。一本一本の触手がウネウネと動き、近くにあったビルの壁を挟み取る。

振りかぶるように――右腕を前に投げつけるように、ヨトウンが構える。

瞬間、右腕を形成していた一本の触手が、巨人へと伸びた。まるでゴムのように、先ほどまでの数倍の長さになりながら、巨人へと迫る。邪魔な物は勢いに任せて貫き、巨人のその胴体を破壊せんとして。

貫くのか、はたまた叩き潰すのか。ヨトウンはどちらも出来た。巨人はヨトウンの攻撃を避けようとせず、降り立ったその場でただそり立っているだけだった。

ヨトウンと巨人の間が大きく歪み、それまで赤と黒のみだった空間が色相に溢れていく。まっすぐに伸びていたはずの触手が空間ごと揺れ動き、巨人の周りが静かに揺れた。うねるような、なにかが捻じ曲げられるような音。同時に、巨人の周りが一瞬、パツと光ったように発光する。

凄まじい勢いで巨人へと飛来したはずの触手。凄まじい勢いで進んでいたはずだが、徐々に勢いが無くなっていく。空間が触手を包み込むように歪み、数秒もしないうちに止まってしまった。

指向重力の防壁――それが巨人を守っている、ということだ。伸ばした触手をすぐさま戻し、ヨトウンが右腕の触手を一本に束

ねる。ウネウネと纏わり付いた触手が円錐螺旋状に形成され、刃物のように尖る。

ヨトウンが右腕を構え、一気に巨人へと肉薄した。街を歩いていた、その時の何倍もの速度だ。駆けた衝撃でヨトウンの周りが激しく歪むほどである。そのひ弱な外見から想像も出来ないような速さで、ビルとビルの間を疾走する。

一瞬にして巨人との距離を縮めたヨトウンは、その右腕を巨人に向けて勢いよく振りぬいた。

右腕が隣のビルに直撃し、破壊音と灰色の瓦礫が辺りに飛散する。粉々に砕け散った破片はヨトウンの右腕と共に巨人へと迫り、先に吹き飛んでいた粉末状の破片が巨人の防壁に当たり淡く光った。その一瞬がスローモーションのようにゆっくりと動き、ヨトウンの軌道が鋭く描かれる。

右脚に全体重を掛けるように姿勢を動かし、素早く腰を落とす。向かってくる触手に相対するように左腕を振り上げると、ぶつかったと同時に触手を払いのけた。

素早く体を起こすと、右脚を滑らかに後ろへと動かし、構える。体全体で右脚に力を溜め込み、左脚を軸として右脚をしならせる。おそろしく細い、折れてしまいそうな足がたちまち武器となる。

ヨトウンの攻撃を受け流した巨人は、その華奢な右脚でヨトウンの体を蹴り上げた。

目にも分かる、激しい防壁同士のぶつかり合いが起き、巨人とヨトウンの間の空間がその実体を無くす。波紋は風のように辺りに広がったが、一秒もしないうちに見えなくなってしまった。

ヨトウンが、蹴られた衝撃で吹き飛ばされた。数十秒間宙に浮くほどの衝撃で、四肢が人形のようにでたらめに広がる。地上に落下してもなお勢いは衰えず、倒壊したビルを巻き込みながら数百メートル前方でようやく止まる。

アスファルトとコンクリートの粉塵の中で、ヨトウンが必死に起き上がる。思いもしない、痛烈な反撃で動揺しているのかもしれない。

警戒しているような動きで、距離をとるように後ろへと跳躍した。

――逃がさない――。

足が地面に食い込む。低い姿勢を保ちながら前方へと体重を移動させ、両脚でゆったりと踏ん張る。体を持ち上げるように両腕が構えられ、頭部は逃げ行くヨトウンをしつかりと捉えていた。

身を切り裂くほどの突風が巨人から起こり、周辺に転がっていた兵器の破片がバラバラと散らばる。巨人が立っていた道路は放射線状に陥没し、その衝撃を物語る。

飛ぶようにして、巨人が大地を跳ねた。飛ぶというよりも、砲弾クラスの質量弾が水平に発射されたというほうが正しいかもしれない。いや、それ以上の衝撃だった。

まるで大砲から放たれた砲弾のように、ほぼまっすぐに都市を駆け抜ける。

先ほどのヨトウンに劣らない、尋常ではない加速力だった。走るだけで辺りの建造物が軋み、白煙が舞う。

既に数千メートルは離れていたであろう、両者の距離は、一瞬で数百メートルにまで縮まった。

逃げる体勢に入っていたヨトウンが、触手を扇状に広げ全長を超えるほどの長さまでに伸ばす。四方に伸びた触手は空中で揺らぐと、恐ろしい加速力で接近する巨人に向かって飛来した。

数本の細い影が、巨人を捉える。

――無駄だ――。

力いっぱい踏み込んで、さらに加速。まるで影のように、駆けていた巨人の姿が霞む。

その影が、触手の間を通り過ぎる。影を追尾し切れなかった触手が道路に深々と刺さり、ビルを貫通して崩壊させた。それでも、巨人を攻撃しようと触手が追尾を再開する。

極限まで加速した巨人が、ヨトウンの眼下にまで迫る。目と鼻の先の距離。巨人には触手が迫ってきていたが、この距離では間に合わない。

影が重なり合い、低い、打楽器を叩いたような破裂音が響く。同時に影から波紋が現れ、ビリビリと都市を震えさせた。

怯んだヨトウンを、巨人が掴み上げる。

巨人の右手がヨトウンの頭部を掴み、締め付けた。防壁が滅茶苦茶に屈折し、悲鳴を上げる。干渉した防壁が逃げ場を無くし、淡い光となって巨人とヨトウンを照らし上げた。同時に、巨人の左腕。下腕の装甲がスライドし、装甲内に拳が収納される。それに連動して、隠れていた骨格が外気に触れる。

砲身。拳と同じくらいの大ささの四角い砲身が、中から現れた。

巨人が静かに左腕を動かし、砲身をヨトウンの胸部に擦り付ける。

砲身の中で重力が動き、エネルギーの塊のようにバチバチと発光する。それを中心に、辺りの防壁も揺らいでいく。ヨトウンが砲身を避けるようにビクビクと動き始め、触手が一斉に砲身を攻撃したが、全てが防壁に阻まれ砲を攻撃することが出来ない。直接攻撃できないことを悟ったヨトウンが、巨人から逃れようと暴れ始めた。光りが最大限にまで膨らみ、防壁を避けるように巨大になっていく。怪しく光る巨人の頭部が、一瞬パツと光ったようにも見えた。

発砲音は無かった。ヨトウンの胸部が、抉られるように消滅する。その反動で千切れた下半身が空中へと吹き飛び、他の部位もでたらめな方向へと飛散する。残ったのは巨人の右手が掴んでいた頭部だった。その頭部の発光体も光りを無くし、灰のようにサラサラと消えていく。ヨトウンの体全てが、灰のように消えていった。

『ヨトウンの破壊を確認しました。ポイントA1で機体を回収します、移動を開始してください』

女性の声が聞こえた。その声はとても落ち着いていて、語りかけるように脳裏に響く。ただどこか事務的で、なにか戸惑っているような口調だった。

腕が元の形へと戻り、感じていた違和感が無くなっていく。敵が

いなくなった反動だろうか？ 物足りなさが心を支配している。思っていた以上のつまらなさに、思わず気が抜けてしまった。

目標地点へと振り向き、思いっきりジャンプする。重力に逆らう衝撃が体を襲い、同時に興奮と高揚感が溢れ出てくる。

飛んでいるだけでも、楽しい。

その姿が小さくなっていき、街から異形の物体が姿を消す。

崩壊した重慶の街に残ったのは、燃え盛る炎だけだった。

episode? 1・大陸蹂躪?

民共和国直轄市天津

同日・午後十一時十三分 中華人

重慶から、北北東へ約1000キロ。中華人民共和国、天津市。中国大陸北方に存在するこの都市は、ヨトウンの被害が最も多い内陸部から遠く離れていたため、世界的にヨトウン被害が多い中国国内の中で珍しく、被害の少ない都市であった。

古くから港湾や工業地帯などが発展されていたため、設備的基盤は整っている。そのため近年では対ヨトウンを想定した軍事施設などが数多く建造されていた。街には大規模な滑走路や軍港が数多く存在し、兵器が楽々と通れる巨大な道路が複数存在している。

都市自体も嚴重な警備がされており、こういった軍事施設には一般人は入ることは出来ない。故に、街の規模とは反対に、その活気は寂しいものになっていた。

「死ね、今すぐ死ね。ヨトウンに踏み潰されて死ね」

その中の、大規模な施設の内の一つ。巨大な滑走路の上で、一人の少女が怒りの矛先を一人の青年に向けていた。人差し指をビシッと反らせ、困惑している青年を睨み付けている。

背丈は150cm後半くらいであろうか。見た目で判断するのならば10代前半の年齢にも見える。胸まで伸ばした黒髪を首の辺りでまとめているため大人びた印象も抱くが、気難しく口を結んだその顔はやはり子供っぽい。明るい浅緑色のパーカーに、ジーンズとスニーカーという服装も、子供らしい印象を大きくさせている。だが、服の上からでも分かるほどの、まさしく『たわわに実った』その胸は、子供のそれにしてはあまりにも巨大だった。

少女の後ろに、轟々とエンジン音を響かせる、黒い航空機が着陸している。それがまるで黒い背景のように見えて、妙な威圧感を少

女に与えていた。

『死ぬ』という心無い言葉をぶつけた少女が、ムスツとした表情のまま青年に詰め寄る。

「——んなこと、いきなり言うなって……」

青年は困ったような表情で仰け反り、苦笑を浮かべながら呟いた。

> i 1 7 6 8 2 — 2 2 9 3 <

まるで子供をなだめる大人のようにであったが、実際二人を並べてみると、青年より頭一つ分小さな少女は子供のように見える。少なくとも二人は同じ年であったが、先ほど表現したとおり少女のほうが幾分か子供っぽく見えるのだ。

青年の見た目にも関係があるのかもしれない。少女と比べ、比較的暗めの色を貴重とした服装。白のシャツに黒のジーンズ、白のスニーカーと、当たり障りの無い、平均的な物だ。スリムな印象で、見たくも悪くない。少女よりも三つは年上には見えた。

態度が気に食わないらしく、少女が不機嫌そうに睨む。青年はそんな少女の態度に困惑しているようで、深いため息と共に頭を抱え込んだ。

「……いや、あの、マジで止してくれ。疲れてるからさ。梓も分かるだろ？」

疲れているのは本当だったし、つい数時間ほど前にも緊急の“用事”があった。

少女——もじしたあずさ守下梓もそれをよく知っている——というより同じ境遇に立たされることが多々ある人間であった。青年にとっては幼馴染であり同業者とも言える存在であり、どちらにも欠かせない存在である。

故に、こういったやり取りは珍しいものではなかったし、同時に『またか……』と思ってしまうやり取りだったのだ。

「ほらほら……邪魔になるから行った」

少女——梓の脇をすり抜けようと、青年がフラフラと歩き出す。腕をだらしなく揺らして動くその様は、まるで軟体動物の動きのよ

うだった。

その姿を見た少女が、

「——わざわざ出撃体勢を取ってた私を無視して？ 人の目標を泥棒宜しく盗った拳句？ 疲れたと？」

青年に向けて、棘のある口調で言った。

青年がピタリと硬直し、ゆっくりと梓の方へ振り返る。

自身有り気な、笑みのこぼれる表情。『フフンッ』と、少女が調子のいいことに鼻で笑ってくれた。

対する青年。梓の言葉になにかを感じたのか、難しく口を結び、目頭を強張らせる。

言葉を選んでいのか瞳を泳がせ、出た言葉は、

「……だって重いじゃ——」

「あの距離で重いか関係ないでしょ！！ 結局勝手に行っただけじゃない！？ わざわざ追い越してくれてさ、『一号機は先に向かってくれ』とか言い切らないでよ！！」

まくし立てるように、梓が青年に言い放った。途端に青年が肩をすくめ、少女の予想以上の“口撃”に驚く。

「重いのは確かなんだしさあ……それに、結果的に片付いたんだからいいじゃないか」

「健吾はそれで良いかもしれないけど、私は納得いかないの！！」

「はあ……」

一般人には分からない、かなり難しい問題ではある。それこそ、周りには少女が駄々をこねて、青年を困らせているようにも見えるだろう。実際、青年は少女の言葉に困っているし、その対応にも困っていた。

だが二人のこの会話は、大きく言ってしまうえば、間違いなく地球人類全員に関わっている会話であった。

数時間前の重慶での戦闘。都市の大半を破壊つくし、人民解放軍を壊滅までに追い込んだ巨大生物、ヨトウン。そのヨトウンを、まるで子供のように圧倒し破壊した、青色の巨人——。

「——まあ、準備までしてたのに出たのは悪かったけどさ……。でも、早く着ける方がヨトウンを破壊するのは当然じゃないか？ 今回は俺が早かっただけってことだよ」

この青年——御剣健吾みつるきけんこが、その巨人を動かしていたのだ。巨人その物と言ってもいいだろう。その巨人の、見ただけではとても巨人を動かしているようには見えないが、巨人の正式なパイロットだった。

そして、青年を罵倒していたこの少女、守下梓も、青年と同じく巨人のパイロットだった。

御剣の言葉を聞いて、梓が『むぐぐつ……』と口籠る。ヨトウンが破壊された今、破壊する前のやり取りを口論するのは無駄なことであった。梓もそれは知っていたようで、言葉が出てきそうにない。「はい、この議論は終了。さっさと行くぞ」

梓の手を掴み、飛行場の端に存在する建物に向かって御剣が歩き出す。突然歩き出してしまったためか、引つ張られた梓がバランスを崩した。大きな声で梓がなにか言い始めたが、御剣はそれを全て無視した。

シンプルな、灰色一色で染められた建物に向かう。

「——寝させてくれ」

梓を無視して歩く御剣の頭に、強烈な痛みが走った。

「——やっと来た。なにを滑走路で言い争ってたの？ ……まあ、大体分かるけど」

扉を開け、中に入った途端、あきれた物言いでそう言われた。

灰色のスーツで身を固めた、硬い印象の女性だった。鋭い、意志の強そうな瞳。女性的な長い髪は後ろで束ね、赤い縁の眼鏡がキラリと光っていた。

二人とはプライベートでも一緒なのかもしれない。その硬そうな印象と比べ、口調はずいぶん砕けていた。

「……御剣君、どうしたの？」

梓の後ろでうめき声を上げ後頭部を抱え込み震える御剣を見て、女性が梓に視線を移す。

「色々あつたんです。ねっ、健吾」

平然と笑顔で答えるが、御剣の様子を見える限り『色々あつた』では済まされない気がする。

現に御剣は、

「つく、つう……お。かつ——」

凄まじいうめき声を必死に押し殺していた。

自然に顔が引きつる。鈍器？ あるいは素手？ 脳裏に御剣が殴られるシーンがいくつも映し出されるが、いずれも痛々しい場面ばかりだった。しかし、梓の笑顔を見ていると指摘してはいけないうな気がする。

「……大したことじゃないんだつたら別にいいけど」

人の付き合いに口出ししてはいけないと思い、それ以上は気にしないように勤めると決めた。

「——っで、話だけでも進めていいかしら」

脚を組みなおして、女性——津田友美ただともみが言った。

ポツリとおかれたパイプ椅子は保管環境が悪いらしく、所々錆び、ギシギシと今にも折れそうな悲鳴を上げた。机も同じで、少し体重を乗せただけで揺ら揺らと足がふらつく。それだけこの環境が悪いということであつたのだが、この三人には関係は無い。

机の上に広げられた中国大陸の地図を囲んだ段階で、津田が喋りだした。

「出発前に説明したと思うけど、再確認のためにもう一度説明するわね」

「五日前の5月8日、陝西省の西端で大型の重力波反応が複数確認されたわ」

ヨトウンなど、内部に重力制御装置を内蔵している物体は、自身に掛かる重力を意図的に無くす（あるいは固定しているのかもしれない）ことでその原型を保っている。自分と、周りの空間だけを限定的な無重力にして、自分だけが別の空間に存在していることを実現しているのだ。また、ヨトウンを覆う空間は何百、何千、それ以上にも屈折を繰り返すことによって隙間を消している。そのため、物理的な手段を利用した攻撃はヨトウンには届かない。たとえ届いたとしても、それは重力を操作できる物体にしか出来ないことなのだ。まさしく、『防壁』と呼ばれるに相応しいものだった。

ただし、絶対的な防御手段である防壁ではあるが、完全なる防御手段というわけではない。攻撃が全く通じなくても、ヨトウンの居場所を特定することは出来るのだ。

方法は簡単である。大気中の物質の動きを、調べればいいのだ。重力が屈折しているということは、その重力の中に存在している大気は、重力に倣って浮かぶ。それが、数え切れないほど発生しているのだ。

あとはそれを目に見えるよう数値化すれば良い。そうやって検出された防壁を、重力波反応としているのだ。

そして、陝西省の辺りで重力波反応があったということは、ヨトウンがその付近に存在していると言うことだった。

「確認された重力波反応は、確実にヨトウンのものだった。中国軍はヨトウンを破壊しようと軍を派遣して、そして全滅したわ」

ヨトウンに対して、普通の兵器では太刀打ちできない。それは絶対的な事実であり、苦しい現実であった。

だが、津田の言葉中に、梓は疑問を感じた。

「……あれ？ けど五日前に確認出来たのなら、国連軍が私達と協力して素早くヨトウンを破壊できたはずよ？ ここまで被害が拡大するなんてありえない」

「大国の面子って奴だな」

絶えず後頭部をさすっていた御剣が、皮肉たっぷりに口を尖らせ

る。

中国はあくまでも国としての面子を守りたかった。他の国家——または国連軍のような他人に国家を守られては、国の軍事力、そして威厳を大きく失ってしまう——そう思ったのだろう。人民解放軍以外の大部隊が来ても結果は変わらなかったかも知れないが、ヨトウンの行動を遅らせることは出来たかもしれない。

結局、行動が裏目に出てしまったわけだが。

「御剣君の言う通りではあるわね。最終的には、私達に頼ったみたいだけど」

津田が赤いマジックペンを取り出した。

「陝西省のどこかにヨトウンが存在しているのは、重力波反応でハッキリしているわ。北部の砂漠に存在していると仮定されてる」

「問題は数ね。複数確認されているらしいけど、数は？」

梓の言葉に、津田が頷く。

「少なくとも、これだけのヨトウンが確認されてる」

マジックペンのキャップを外し、地図の、ちょうど陝西省付近に赤い×マークを記入し始める。一つ、二つ、三つと書かれていく×印は、最終的に五つ書かれた。

五つの×マーク。ヨトウンの現在地——ではなく、最後に確認された地点。既に遠く離れた、別の地点に存在しているだろう。いつ、付近の都市で被害が出てもおかしくは無い。

しかし、これが唯一の目印だ。

「ヨトウンの脅威は言わなくても分かっているとは思うけど、一体であれだけの被害を叩き出せる……。これ以上増えたら危険だわ」

「付近一帯にいるヨトウンの各個撃破、脅威を取り除く。それが今回の作戦目標よ。東側から御剣君が、西側から梓が攻撃を開始する。詳細な指示は現地に到着してからになるけど、ヨトウンを見つけたら速やかに破壊することに変わりないわ」

「ねえ、中国はこの作戦に協力するの？」

先のヨトウンへの攻撃、そして重慶での戦闘。これまでの戦いで

壊滅的な損害を受けた人民解放軍は、果たして行動するのだろうか？ 普通に考えればこちらに全てを任せる可能性が高いが、プライドの高い彼らだ。攻撃をする可能性も高い。

梓の質問に、津田が中国政府から送られてきた紙の束をバラバラとめくる。携帯情報端末が主流の、現在において紙の資料は珍しい処分のしやすさから選んだのだろう。

「——中国軍は南側から攻撃を開始する予定よ。ただ、戦力はあまり無いから、せいぜい砲弾が数発飛んでくるだけね」

それだけ戦力を失ったということなのだろう。戦力を大量に失い、都市は蹂躪され、現存する戦力も様々な面で消耗したことだろう。まだ攻撃できる戦力が残っている分マシだった。

「それじゃ、四時間半後の午前二時四十分に出撃するわよ。それまで二人は待機。集合は輸送機の前で」

御剣達のいる 天津第7飛行場 は、2005年に完成した非公共の超大型の飛行場だ。他の飛行場に比べ設備、施設面で大きく遅れをとってはいたが、5,000mもの長さを持つ滑走路が存在し大型の旅客機の運行も可能なほどの巨大さを誇る、非公共用飛行場としては、比較的規模の大きい飛行場であった。

時の冬 直前に完成したこの飛行場は奇跡的にも大きな被害を受けず、以後数年に渡って人民解放軍の拠点として運用されてきたが、元々の劣悪な設備面が影響し、数年前にその役目を終えた。

現在は、ある組織の中国大陆拠点として使用されている。

作戦開始から三十分前、五月十四日の午前二時十分。健吾と梓は、滑走路前で津田が姿を現すのをじっと待っていた。

二人とも、ウェットスーツにも似た黒い服を着ていた。胸部や脛の部分はプロテクターのような物で覆われ、背中には機械のバック

バックを背負っている。また肩や大腿部にはパッドでも入っているのか、他の部位に比べ大きく膨らんでいた。その上に、茶色のフライトジャケットを着用している。

駐機場に駐機している二機の輸送機から、低いエンジン音が鳴り響く。防音処置は施されているではあるうが、飛行場の外に漏れているのは間違いなさそうだ。それほどエンジン音は大きい。

見れば見るほど、巨大な航空機だ。ジャンボジェットとも呼ばれる、ボーイング747を巨大化したようなデザインだが、機体の胴部と底部の形状が大分異なっている。貨物の搬入方法が違うのか、機全体も細部に微妙な差異が見て取れる。全体が黒に塗装された様は、湾岸戦争時に運用されたステルス戦闘機 F-117 を彷彿とさせた。

輸送機の周りで、整備員達が最終メンテナンスを行っている。ただでさえ巨大な航空機なのだ、限られた人員でメンテナンスを行うには大変な労力を必要とする。日本からわざわざ同行して来ていた整備員達は出撃に間に合うよう、必死に作業を行っていた。

「……暇だね」

目の前で行われている作業を見ながら、梓がポツリと呟いた。出撃は三十分も後なのだが、なんらかの緊急事態を想定して毎回三十分前には集合しているのだ。輸送機内で待っていても良かったのだが、必然的に二人は分かれてしまったため、こうやって外で喋りながら時間がたつのを待っている。津田から『輸送機前で待つように』と言われていることもあるのだが。

「——じゃあ、あれだ。吉谷から聞いた話なんだけど……」

「私も、吉谷君から聞いたし。風紀委員と漫画研究部が、この前の放課後でやったことでしょ？ 陸上部辺りで結構大きな噂になってたし、わりと知られてるっぽいけど」

「立体造形物愛好会が依頼したんだっけ？ なんか色々あったみたいけど」

「色々あったんでしょうねえ……」

暇なときに喋ることは、専ら学校のことだったりする。他愛もない噂話から、この前見たドラマやニュースの話。同じ学校で、同じクラスの二人にとっては唯一現実に戻る時――。いや、世界的に見れば、こちらの方が“現実”なのかも知れない。それでも、捨てることの出来ない瞬間だった。

「風紀委員も裏で怪しいことしてると言っし、お互い様だろうな」
「……でしょうねー」

目を擦りながら梓が答える。御剣も大きなあくびを一つ、手で隠しながらした。時間が時間だけに、思いのほか二人のテンションは低めだ。こんな時間帯に出撃することは珍しくは無いが、それでも深夜には変わらない。話し続けていても、眠気を抑えることは不可能だ。

「――つと」

建物から津田が姿を現し、こちらに向かってくる。

「……どうしたんだろ、難しそうな顔して」

先ほどと同じ服装だったが、二人と同じフライトジャケットをやり着ていた。私物なのか、ジャケットの右ポケットには煙草の箱が押し込まれている。白にささやかな黄緑の装飾、セブンスターは一箱830円。

困惑、焦りが入り混じった表情。それこそ、今にも襲い掛かってきそうな、そんな表情だった。

「――中国側に動きがあったわ。確認されていたヨトウンに、砲撃を加えた」

「嘘でしょ！？　なんでまたこんなタイミングで……」

怪訝そうに梓がたずねる。御剣も同じ様な表情で『ありえねえ』と呟いている。

まさか、わざわざ被害を出すために攻撃を加えるとは思わなかった。あれだけの被害を出しておいて抵抗するとは、普通は思いつかないはずである。後は任せておけばいいものを――。

「正確な数は分かってないけど、おそらくはかなりの被害が出たは

ずよ。部隊は撤退を開始したみたい」

「――馬鹿だ、馬鹿ばっか。これでヨタウンが都市部に近づいたらどうする気だよ」

それこそ大誤算だ。重慶のように、すでにかなりの被害を受けて住民が避難し終わっているのならまだしも、足元で人が逃げ惑っている状態で戦闘なんて願い下げだ。普通に戦う数倍の疲労が掛かるし、うまく戦うことも出来ない。

「……良いニュースもあつたわ。人民解放軍が攻撃してくれたおかげで、ヨタウンの位置を特定することが出来た。撤退中の部隊からも情報が得られるからすぐにでも戦闘に突入することが出来る」

「……クレードルを緊急発進させるわ。ヨタウンの詳しい現在地は離陸後説明する、御剣君は二号機、梓は私と一緒に二号機に」

二人が頷き、搭乗を待っていた黒の輸送機――クレードルに乗り込む。整備員達にも一斉に発進準備の声が届き、逃げるようにクレードル――ゆりかごから離れていく。同時に、四基のターボファンエンジンの唸り声も大きくなり、先ほどまでとは比較にならない爆音が辺りを支配した。

整備員が完全に離れたのを見計らい、クレードルがその巨体をゆっくりと前進させる。まず一機が誘導路を通り、滑走路内へと侵入する。

少しずつ、ゆっくりと、徐々に加速を始める。航空機が滑走路を走り、飛び立とうと加速する。黒い、カラスの羽のような両翼が風を斬る音がした。

翼が軋み、その巨体を空へと押し上げる。

人と、一体の巨人を乗せたゆりかごが、漆黒に染まる空へと舞い上がった。

episode? 1・大陸蹂躪?

五月十四日・午前四時二十九分 中華人民共和國行政区画陝西省

陝西省は都市部と高原、砂漠で構成された都市だ。特に高原は黄土高原と呼ばれ、その地特有の情景を形成している。クレードルが離陸して二時間が経過し辺りが明るくなり始めたため、雲間からは青色の空が覗くようになっていた。あと数時間後には太陽で大地が輝くことになるのだろう。だが、その大地に人々は存在していない。

省全域に、避難警報が発令されたのだ。数時間も前に住民は避難し終えており、現在陝西省にいる人間は数十人ほどこしか存在していないはずである。

そのため、陝西省全体が不気味に静まり返ったような状態に陥り、本当の映画の舞台——意図した場面を造り上げられるために造られた、人工の地に見えたのだ。

「——これね……。重慶の固体と細部が異なるみたいだけど、同じタイプだわ……」

暗い クレードル の内部。電子機器の輝きしかないその中で、津田が呟いた。

クレードル の胴体、その底部に存在しているカメラには一体のヨトウンが映し出されていた。重慶に現れた固体と外見はほとんど一緒だったが、太い触手が一本しか両肩に生えていない。また、触手の先は花びらのように開いており、数箇所、穴のようなものが開いていた。だが、間違いなく重慶のヨトウンと同タイプである。対人用に特化した、人型ヨトウン——。

陝西省に現れた、ヨトウンを見つけたのだ。一体しか発見できなかったが、他の個体も周辺にいるはずだ。先走って大損害を被った、人民解放軍のおかげで見つけられたとも言える。迷うことなく、こ

うしてヨタウンを見つけられたのは幸運だった。

コンピューターにヨタウンの外見、予測される機能、構造を打ち込み、新たなデータを作る。今後同タイプのヨタウンが現れる可能性は高い、今回の戦闘データと合わせて、早期に対策を練ろうという考えだ。

ちなみに、クレードルと呼ばれるこの輸送機は、二機しか運用されていない。普段は日本にある飛行場の地下に格納されていて、この巨人の長距離輸送が行われる時だけ飛行するのだ。天津には二機の巨人が作戦のために日本から送り込まれているが、そのためにはクレードル二機が必要となる。一機しか搭載できないからだ。

そのため健吾と梓は、作戦前に必然的に分かれてしまうことになる。津田は通信機器の充実した一号機——梓と共に飛行することとなる。

黄土高原の北東、八千メートルを飛行していたクレードル一号機のリーダーは、この一体と付近にいるであろうもう一体の反応を確認していた。

「——発見したヨタウンのデータを送ったわ。確認できる？」

ヘッドフォンから口元に伸びるマイクに喋りながらキーボードを操作する。御剣と梓に、この声は聞こえている。

数秒もしないうちに、二人の声が聞こえてきた。

「——俺が破壊したのとほぼ同じかな？ 対人戦闘用なのは相変わらずってところか……」

「じゃあ楽に終わりそうね。人にしか意味の無い攻撃じゃあ、ほとんどノーダメージっぽいし」

「出撃直前に、んなこと言わない。五体いるのよ？ 五体。本気になつてくれないとそれだけ被害が増すの」

「そうだぞ、梓。楽に終わる戦いなんて無い、遊びでやってんじやないんだからな。——津田さん。見た限り西側に集中してるっぽいけど、東には何体ヨタウンがいる？」

「うるさい！！ 健吾だって楽しんでる節があるじゃな——」

「西に二体、東に三体つてところかしら。詳しいことは今から……
つて。うわ、東側の二体は固まって行動してるわ。しかも残る一体
とかなり離れてる——」

「なんとまあ……、仲の良いことで。めんどくさいことになりそう
だなあ……」

「近くに投下するのは二号機が危険すぎるわね。一体は遠距離から
破壊したほうが良いわ」

「了解、それでやってみる」

「——つて、華麗に無視すんなコラア！！！」

二人の、あまりに高いスルースキルに梓が声を荒げる。それこそ、
ヘッドフォンから殴りかかってくるような勢いだ。キーンと耳の中
で音が響き、思わず津田は顔をしかめた。

「——ごめん、流れてスルーしちゃった。だから機嫌直して、ね？」
「子ども扱いすなこんにやろおお！！」

少女特有の可愛らしい怒り声と、乾いた笑い声とする。その笑い
声を聞いた少女がさらに怒り、平謝りと様々な色彩の音がヘッドフ
オンから流れ、聞こえる。

——いけない、ちゃんと仕事をしなければ。

緩んだ頬を引き締め、頭を切り替える。もつとこの会話を聞いて
いたい、自分にはやるべきことがあるのだ。

「——こちらオペレーター。二号機、現在地と高度を知らせよ」

オペレーター。彼女——津田に与えられた仕事。巨人をサポート
し、その作戦行動を指揮する役割。同時に、見守る存在。

数秒ほど時間をおいて、クレードル 二号機を操縦する、操縦
士の声が聞こえてきた。

「——こちら二号機。現在、空域K P 6 7 - 2 5を高度八千二百メ
ートルで飛行中。指示を頼む」

「こちらオペレーター。二号機は現状の高度、進路を維持したまま
K P 6 7 - 4 6に進入。投下可能状態に移行、こちらの指示と同時
に投下。以後、作戦区域内で待機せよ」

『二号機、了解』

回線を切り替え、搭乗している クレードル 一号機のパイロットにも同様に伝える。『了解』と、短い応答が耳に届いた。

短く息を吐き、回線を二人のものに合わせる。もうそろそろ、出撃の時間だった。

流石に大人しくなっているだろうと、安易な予測をしながら回線を繋いだ。

『ハイハイ、無視したことは謝るからさー。機嫌直せって、梓』

『棒読みで言われてもなんの説得力も無いわよ！！ 明らかに私を怒らせる目的で言ってるでしょ！？ そうに違いない、てかそうとしか考えられない！！』

『そんなの気のせいだってー。俺が梓を怒らせるようなことするわけないじゃないかーアハハハハハ』

『撃ち抜くぞ！？ あるいは拘束するわよ！？』

……まだ言い合っていたのかと、津田がため息をつく。これから戦闘を始めるつてのに、このお二人さんは……。幼馴染という存在は、こうも喧嘩するのだろうか？ あつ、『喧嘩するほど仲が良い』ってという言葉があったなあそっぴいあ——。

——って、仕事よ私。

大きく息を吸い込み、肺一杯に空気を溜め込む。同時にマイク的位置を調整、ぶつかって雑音が入らないようにする。

「——はいっ！！ お喋りはそこまで！！ 出撃するぞ！！」

わざと耳に響くように、マイクに向かって叫んだ。ついでにマイク音量をMAXに調整して、確実に黙るように。

必殺、『場に割って入る高速の怒鳴り声』

『……了解、です。津田さん』

『——こつちも、準備オツケーだよ？』

効果は抜群だ！！ 御剣に100のダメージ！ 梓に100のダメージ！

「——分かればいいのよ」

二人の言葉に、少し笑った。根は子供のままだと、なぜかほつとする。

……さて、楽しい時間はここまでだ。課せられた任務を達成する時間が来た。

「……じゃあ、行くわよ」

空から、なにかが降ってくる。黒のゆりかごからまるで振り落とされたようなそれは、地表に向けて加速しながら落ちていた。

見方を変えればスカイダイビングを楽しむ人間のもうでもある、が、スケールが違いすぎる。その巨体は風を切り裂き、大気を圧倒しながら落下していた。そもそも、パラシュートといった類の装備を着けていない。

『……………きゃっほおおおおお！！！！』

両手両足を広げた巨人が興奮——あるいは錯乱したかのように、機械的な声を発する。アクロバティックに、まるでサーカスショーのピエロのように、華麗に二回転。

重慶に現れた巨人だった。いや、違う。重慶の青の巨人ではなく、それに似た、なにか別の巨人だ。

着地の寸前、もう一度一回転。舞い上がった風で、辺りの砂や木々が弾け飛んだ。

地を焼く雷の剣の如く、爆音が響いた。土煙がブワツと広がり、衝撃波のように広がっていく。巨人を中心に発生した土煙は周辺のを巻き込みながら、数秒後によりやく収まった。

緑色の巨人だった。重慶に現れた、青の巨人の青い装甲がそのまま緑色になっている。青の巨人に比べその色は暗く見えたが、同じ様に、装甲その物の色が揺らめいている。

緑の巨人の外見は、重慶に現れた巨人とよく似ていた。違う点を挙げるとするならば、頭部と胸部の形状、そしてカラーリング。両肩からぶら下がっている細長いプレートである。それがなんなのか

はわからないが、おそらくこの機体最大の戦略的特徴であることがわかる。

だが、巨人——という印象は全く抱かなかった。確かに、全高40mと巨大なのであるが、落下時の動作、声。それはまるで新しい玩具を貰った子供のようなものである。どことなくその拳動も、特に落下時の拳動はまさに、幼い子供だった。

『——フツッ、アハハ……。——』

笑い声が、巨人から聞こえる。肩を上下させ、興奮を抑えられていないようである。なにを仕出かすかわからない、近づいてはいけないという雰囲気、自然と発生している。その声は驚くべきことに、少女のものであった。

巨人のすぐ近くに、長方形のなにかが落下する。巨人ほどではないが、とてつもない落下音と衝撃を発生させ、地面に突き刺さる。それだけの質量を持つということだろう。

巨人が突き刺さっているその物体に近づく。

躊躇無く、それを引き抜いた。

少女の目に映るのは、巨人の目を通して見える外の風景。巨人の目は少女の目であり、巨人の五感少女の五感。巨人に与えられる情報は少女へと無意識に伝わり、ストレス無く、数字と記号による情報が脳を満たしている。二つの体は一つの体。故に、機械と生身の体に壁の概念は存在せず、全てにおいて、少女は巨人と一体化していた。

少女——守下梓は目の前に落下した物体に手を伸ばし、視界の隅に浮かぶ情報を確認していた。

『—— ガル―ダー を投下したわ。そこから二時方向、約5000mにヨトウンがいる。二体目は一時方向に16000m。手っ取り早く、とは言わないけど。早めに片付けて』

はつきりと、女性の声が聞こえる。機械から聞こえるわけではな

い。——いや、正確には機械を通して聞こえているわけだが。その声は少女の頭に、直接聞こえていた。

視界の隅、高速でスクロールされていた情報の波がピタリと止まる。少女はその情報を見る前に、感じ取る。ヨトウンの位置、地形、周囲の状態が、数コンマの遅れも無く、少女に届いた。

巨人が、その長方形の物体を振り上げるように前方へと構える。

右手で、物体に付いているグリップを握り、左腕は優雅に広げている。おそらく、ヨトウンのいる方角へと向けているのだろう。

機械的な駆動音と、鉄と鉄が連動して動くスライド音。物体が上下に割れ、中からフィンを側面に取り付けたようなプレートが現れる。同時に物体から引き金が現れ、巨人の人差し指がそれに掛かった。

『——ヒヒッ……！！——逝っちゃえ』

重力が歪み、無数の“色”が作り出される。周囲の重力が巻き込まれるように物体内に引き寄せられて、空間が屈折するように、火花を散らした。空間が伸びるように、前方へと飛ぶ。

屈折された、指向性を得た重力が発射されたのだ。大気中の物質と反応して、光の軌跡が自然と描かれる。その軌跡は、軌道上の物体を挟み取るようにまっすぐ進んだ。

A E M W - 1 0 0 0 G R ガルダード。グラヴィティライフルと呼ばれる、強力な指向性の重力波を前方に放つ巨人専用の、巨人しか扱うことの出来ない武器。

実弾やレーザー兵器とは違う。防壁に止められることもなく、それすらも巻き込んで消滅させる、絶対的な攻撃性。ヨトウンですら、その攻撃を受け止めることは出来ない。

いわば、巨人の切り札と呼べる兵器だった。

『——外した、誤差10m。予測進路と合わせて対象の現在地を再検索。かすったと思うからこっちに気づいたみたい。データを送るわ』

『——しなくて良いわぁ……大まかな場所さえ分かればそれで

良い……』

身を屈め、未だ薄暗い空を見つめる。両脚をグッと踏み込んだだけで、大地が足の形に陥没した。巨人の頭部にあるキャノピー——目が、怪しく光る。

大地を蹴り上げるようにして、跳躍。『ブウオン！』と、風が一瞬で巻き上がる。緑の巨人は、まるで大空へ羽ばたく鳥のように空へと跳躍した。

走り幅跳びの選手のように腕、脚を器用に動かし、バランスを取る。何百メートル跳躍しているのだろうか？ もはや跳躍ではなく、浮かんでいるようだ。

『……アハハ……ヒ、ヒヒ……とぶって、さいこおおお——！』
でたらめな姿勢で、風に揉まれるように跳ね上がり、落下する。
その姿は巨人ではなく、もはや怪物のような、危険な生物のように見える。

『——み、み、み見つけたあああああああ』

巨人の向かう先に、ヨトウンがその姿を現す。津田の言うとおり、こちらの存在には気づいている。既に戦闘体勢に入っていた。

ギョーンと、巨人がヨトウンの方向に姿勢を向ける。そして、なにを考えたのかグラヴィティライフル ガルダードー を放り捨て、そのままヨトウンへと落下し続けた。

圧倒的な質量を持つ同士の衝突。ズドンッという鈍い落下音が響き、地震でも起こったかのような衝撃が発生する。巨人の体を受け止めたヨトウンは、大地に沈みこむように埋もれていった。

叫び声のような、軋むような音が発せられる。自身に乗りかかっている巨人に向けて花びらのような両腕を一齐に開き、掴みかかろうと動いた。が、それよりも前に、巨人がヨトウンの二の腕を掴む。勢い良く地面に叩きつけ、そのまま拘束する。

『ひ、ひひ、いいいい——。遊ぼうよ、あ、遊ぼうよ？ ——に、ひ、きき』

巨人の防壁の輝きがいっそう強くなり、ガラスのようにヨトウン

の防壁が崩壊する。痙攣したかのように動く巨人の指は、少しずつヨトウンの腕を潰していく。不気味に光る目が、獲物を求める化け物のように怪しく光っていた。

ヨトウンを護る空間がひしゃげ、悲鳴を上げた。ヨトウンの腕が、両腕が巨人に握り潰されたのだ。その腕を、巨人が弄ぶように投げ捨てる。

それだけでは飽き足らず、巨人がヨトウンを殴り始める。

『——壊れるー』こわれるー』コワレロー——きゃ、ひひはきゃかはひゃひいかか……』

巨人が落下してきた時と同じ光景だった。巨人がヨトウンを殴るたびに『ズンッ——！』と重い衝撃が響き、ヨトウンを護ろうとする防壁が悲鳴を上げる。執拗に、終わりそうも無い殴打に、防壁が限界を迎えようとしていた。

ひたすら殴り続ける巨人の姿は、重慶を焼き潰したヨトウンそのものだった。

『梓がヨトウンと接触した。もう戦闘に突入してる。——ライフル放り投げちゃったけど大丈夫？』

御剣の脳裏に津田の声が聞こえた。梓が先に戦闘に突入したことを知らせてくる。どうやら、唯一の射撃武器であるガルーダーを放り捨てたらしい。

——そんなことはどうでもいいのだが。

身を屈める巨人。前方約8000m先には、こちらの存在に気づいていないヨトウンが二体。報告のとおり、仲良く歩いて行軍中だった。

『——今までの出撃でもあの調子』

『いつもと比べて、なーんか興奮してるように見えるんだけどなあ……。重慶のが影響してるんじゃない？』

『——ただそれだけのこと』

視界の隅にヨトウンの距離と周囲の情報が流れ、攻撃する最適の角度と位置が表示された。それを一瞬で理解した巨人——御剣は、ヨトウンに気づかれないようゆっくりと歩き出した。

ここからでも、当たることは当たる。重力波を放つこのグラヴィティライフルの有効射程距離は、実質無限だ。だが、市街地や、人の住む場所ですら易々と発砲するわけにはいかないのだ。ライフルによる攻撃が回避されてしまうと、周りに命中してしまうことになる。復興することすら出来ないような被害を、都市にもたらすかも知れない。

そうになると、確実に、絶対に命中させるためには数百メートルまでに近づかないとならないのだ。今回の遠距離攻撃という手段は、高原での作戦行動を考えた結果の方法なのである。

フラフラと、かなりの低速で高原を進むヨトウン。その一体に、ライフルの銃身を合わせる。弾道の通る道が視界の中心に表示され、視覚的に目標をロックオン。巨体を地面へと寝かせ、ガルルダーを構えた。

まずは一体。確実に、破壊する。

銃身内の重力が屈折し、余波で周辺の空間が若干歪む。巨人そのものに害は無い。

音も無く、大気物質と反応し輝く重量波が発射された。重力波と接触した地面がバチバチと音を鳴らしながら歪み、消滅。重力波の一部となってヨトウンへと向かう。

ヨトウンが気づいた。だが、もう遅い。

地面を巻き込み、大気を引き寄せた重力波が、回避しようとしたヨトウンの体を挟み取った。左脚と左腕の一部が消滅し、バランスを崩したヨトウンが地面に吸い込まれるように倒れこむ。攻撃されたヨトウンはなにが起こったのか分からず、その場でただもがく。もう一体の、攻撃されていないヨトウンはこちらの存在に気づいたようで、凄まじい勢いでこちらに向かってきた。

『——対象Dに命中。破壊はならず、行動不能を確認。補正プログ

ラムの改良が必要かしら？——つと、対象Eが向かってきてる。
どっちから破壊する？」

『E』

体を起こし、一気に地面を踏み込む。向かってくるヨトウンに狙いを定めて、すかさず発砲。放たれた重力波の軌跡が、向かってくるヨトウンに迫る。

その重力波を、ヨトウンは軽々と回避した。

重力を操れるということは、自分自身を高速で動かすことも出来る、ということだ。ヨトウンにとって、超高速で向かってくる砲弾も、飛んでくる小石も同じ速度でしかない。普段ノロノロと人類の攻撃を受けているのは、『避ける必要が無い』ためなのだ。

ヨトウンのすぐ隣を光の軌跡が通過し、ヨトウンの防壁と激しく干渉して火花のような光が散る。重力波はある程度突き進むと、大地を深く抉り消滅した。

『——ムッ』

ヨトウンが巨人に向けて加速。姿勢を低くして、まるで地を這うロケットのように巨人に急接近する。巻き上がった土煙が風と共に広がり、ヨトウンが駆けた跡に突風が巻き起こった。

巨人が ガルーダー を構えて発砲する。しかし、再び回避される。それだけではない、向かってくる重力波の飛び越え、跳躍した。明るくなり始めた空に奇妙な形の黒い影が現れ、巨人の姿がその影と重なる。

その瞬間、黒い雨が巨人へと殺到した。漆黒のカーテンが形成されたように見える。巨人の姿は黒い雨によって消え去ってしまった。花びらだ。ヨトウンの両腕、触手の先。その部分が展開され、そこから黒い弾丸が発射されたのだ。覆いつくしてしまうほど、大量の弾丸が。

砂塵が舞い、黒い雨が降った大地に、ヨトウンが着地する。巨人が立っていたはずのその場所は、黒い雨によって醜く抉られ、その姿を変貌させていた。

巨人の姿は、無い。

先ほどとは打って変わって、気持ち悪くなるほどの沈黙が続く。動いている物はなにも無く、時間が止まってしまったと錯覚してしまいそうだった。唯一つ動いている物は、高原を撫でる冷たい風だけ。

ヨトウンが、不意に足元を覗いた。その瞬間。重力波の煌きが空へと伸び、ヨトウンの胸部を貫いた。

意思を失った体がユラリと崩れ落ち、挟まれた大地に落ちる。致命的な攻撃を受けたヨトウンは巨人の姿を見ることがすらなく、パラパラと灰になり空へと舞い上がっていった。

砂煙の中から、ガルーダーを構えた巨人が姿を現す。その体にはヨトウンの攻撃の跡は無く、先ほどの攻撃が全くの無駄だったことがうかがい知れた。

『——あと、二体』

確実にヨトウンを破壊した巨人が、その巨体を空へと舞わせた。

『——ほらほらあ、抵抗しないと死んじゃうよあ……？ それでいいのかなあ？ きき、ききいひひひ、ひ——』

なにかが強く叩かれる。一定間隔で、まるで遊ばれるように。幼い子供が人形を叩いているのと同じ雰囲気だった。だが、こちらは恐ろしいほど知的で、それでいて幼稚だ。

巨人に拘束されて既に何回叩き潰されたのだろうか、それでもまだヨトウンは生きており、抵抗しようともがいていた。破壊されないよう、手加減された状態で。

『私、ただなぐってるだけだよ？ なぐりかえさないの？』

巨人がヨトウンに喋りかける。当然、ヨトウンに人の言葉など理解できない。自己満足の身勝手な質問。まるで子供に質問している

かのような口調だった。

「——あつ！ もう無かったか！！ 私が？ いじやったもんね！！ ははははは……！！」

ヨトウンがいつそう暴れる。まるで、言葉に反応したように。ヨトウンを護る防壁が巨人の防壁と反応して、巨人とヨトウンの間の空間が大きく歪んだ。

「……あるえ？ まだそれだけ力があるんだあ。すつごおおい！ ヨトウンを殴り続けていた巨人が、その動きを止める。その隙を突いてヨトウンがさらに動きを激しくした。

「元気だねえ？？？ じゃあもつと遊べるかなあ？？？」

暴れた衝撃で砂塵が舞い、砂煙が周辺に充満する。同時にヨトウンの体が地面に当たることに衝撃が発生し、地面が揺れた。

「……………」

砂煙がヨトウンと巨人を覆い、巨人の目と、ヨトウンの目だけが怪しく灯る。

「——飽きた——」

巨人が右腕を振り上げ、凄まじい速度でヨトウンの胸部を貫いた。

「——いいい、いいい、ひひ、かか。ははははは……」

ピクリとも動かないヨトウンを見て、巨人が哄笑する。見下し、あざけ笑う。

第三者が見たのなら、どちらがヨトウンなのか分からなくなってしまう光景だ。だが、事実として、この巨人がヨトウンを破壊し、人々を守る巨人だった。

「さてえ……残る獲物はどこかな？」

獲物を求める巨人が、笑いながら薄闇の空へと跳躍した。

episode? 2・要塞都市?

2・要塞都市

神奈川県立清ヶ丘高等学校へと続く坂道は、登校している生徒によつて穏やかな喧騒に包まれていた。

仲の良い友達同士であるのだろう、思い思いの話で皆盛り上がっている。商業地から離れているためか車のエンジン音すら聞こえないこの道で、小鳥のさえずりと楽しそうな声が響くのは、ある意味人類の生活としてもっとも相応しいものであると言える。

コンクリートジャングルとしての印象が強い京市ではあったが、申し訳程度に一本や二本の草木は生えている。それは京市の印象を大きく変えるものではなかったが、そこに住み着く鳥や昆虫は、少なくとも京市の住民の心を癒していた。

しかし、芳永真琴にとってそんなことは関係ない話である。

『道に響く小鳥の歌声』

だとか、

『太陽の綺麗な光の中を人々が歩く』

などの風景は、生活した中で見慣れているし、なにより真琴にはそんな風景は一切見えていない。

とにかく、寝不足と頭痛で大変だったのだ。

「——ふわっ、ああ……」

アイロンが当てられたワイシャツ、赤色のネクタイを緩やかに着こなし、灰色のズボンを穿いている。深緑のブレザーは洗濯した直後なのか、繊維がキラキラと光っているように見えた。

大きく口を開け、あくびをする。既に何十回以上も繰り返しており、そろそろ顎が疲れてきたところであつた。だが、止められない。頭がズキズキと痛み、真琴は落ち込むように肩を落とした。

「どうした？ 調子でも悪いのか？」

隣を歩いていた一人の男子生徒が喋りかけてきた。真琴とは違い、ずいぶん調子が良さそうである。

その男子生徒の声を、真琴はあっさりと無視した。

昨日は、大変だった。

些細なミスではある。学校から出された課題を、寝る前までスッキリ忘れていただけた。高校生という立場からすれば、むしろ微笑ましいミスであったといえるだろう。

だが、そこから問題だった。

探しても探しても、課題であるプリント、計九枚が見つからない。約三十分間探し回ったところで、衝撃の事実が判明したのだ。

なんの間違いか、真琴の課題を家に遊びに来た男子生徒が持つて帰ってしまったのである。

それだけならばまだ良かったのだろう。問題は“その男子生徒が課題を持ったまま、県外まで移動した”ということである。

なぜ夜遅くに、県外まで移動するほどの用事があるのかはわからない。が、とにかく宿題は真琴から遠くに行ってしまった。さらには『電波の届かない場所にあるため、掛かりません』と、連絡すらつかない状態になってしまったのである。

ひどく慌てたものだった。課題を忘れてしまえば放課後に一人、教室に残されてしまうことになる。勉強嫌いの真琴にとって、それは避けて通りたい物事であったのだ。

結局、電話が繋がったのは夜中の一時で、なんとか男子生徒に帰ってくるように伝えた。

そこからは、怒涛の勢いで時間が過ぎていった。帰ってきた友人を急いで拘束し、課題を取り戻す。朦朧とする頭脳を駆使し問題を解くのは予想以上に苦労した。さらには前日からの頭痛が襲ってきていて、ひどく痛むことも問題だった。

苦手な英語を必死に“解読”したところには、夜中の三時を過ぎたところであつた。

そしてベッドに潜り込み、朝を迎えたのがついさっきである。夜遅くに寝て、不機嫌に起きるのはいつものことであつたが、今回は事情が異なりすぎていた。

「——おいおい、無視るなつて。間に合つたんだからそれでいいだろ？」

そういう問題ではない気がする。真琴の心には、課題を終わらせた代償に命を削つたような感覚が残っている。

「俺の体はボロボロだ……」

RPGのキャラクターみたく、痛々しい台詞を吐く。老人のようにトボトボと歩くその後姿は、まるで暗いオーラに包まれているようであつた。

「頼むから、こういう問題を起こさないでくれ……岩崎」

真琴をそこまで追い詰めた男子生徒——岩崎昭は、そんな真琴を見て平然と、

「直らないし仕方が無い」

と言つてきた。

頼むから直してくれ……と、真琴が力無く呟く。

岩崎という男は、とにかくこういうタイプの人間だった。人付き合いは良いのであるが物事に無頓着で、なにをしているのか分からない人間である。とにかく『結果良ければ全て良し』と考えるタイプの人間だった。さらに変人ときたもので、自分が楽しいと思つたことはすぐに実行に移す。それはそれでいいのだが、巻き込まれる側からすれば迷惑以外のなにものでもなかった。

おまけに成績優秀、清ヶ丘高校でもトップクラスの学力である。容姿も平均以上で、（こいつの正体を知らない）女子生徒からは人氣があつた。

それとは違い、芳永真琴は良くも悪くも平均的であつた。成績は下から数えたほうが早いし、なにより苦手科目は数学と英語という、

全国の高校生の間みたいなものである。

運動能力も並みで、マラソン大会ならば下位に甘んじる。唯一顔はイケメンと言えたが、苦勞人っぽい雰囲気はどこか悪い印象を与えていた。彼女いない暦十五年は伊達ではない。

岩崎とは性格も、ベクトルも全く異なった人間なのだ。だが、なにか似通ったところがあるのだろう。そうでなければバス停で待ち合わせして、こうして一緒に登校するはずが無い。

「……はあ……」

疲れるということは、わかっているのだが。

ふたたび肩を落としたところで、真琴と岩崎の間に誰かが割り込んできた。

「……つで、私は置いてきぼりですか、そうですか」

岩崎と同じく、普段から一緒に登校している女子生徒だった。これまでの会話に割ってはいえる隙間が無かったようで、頬を膨らませムツとした表情を真琴達に向けている。

男子の制服とほとんど同じ制服。ネクタイの代わりに首元には蝶ネクタイが存在しており、スカートの下には太ももを半分ほど覆う黒のスパッツを穿いていた。ショートカットの頭髮には、妖精を象ったような髪飾りがついている。

高校生ではあるのだが——その体型はとも高校生には見えない。起伏の少ないその体型はどちらかというと中学生のソレに見えた。

そういえばバス停から、ほとんど喋っていなかったことを真琴は思い出した。

「いや、悪いな佐奈。なんか忘れてた」

不機嫌そうな相手に言う台詞でもなかったが、この言葉しか思い浮かばなかった。

「すまんが俺もだ、伊藤」

真琴と岩崎の言葉に女子生徒——伊藤佐奈いとうさなは明らかに不服なようで、

「二人ともひどい。もっと楽しく登校しようよ」

持っているボストンバックを二人にポカポカと叩きつける。

「二人が喋って一人が取り残されることはよくあることだ――。結構痛いから止める」

岩崎がそう言うが、根本的な解決になっていない。

「なによ、いくら私が女の子だから話す話題が無いとでも思ってるの」

「いや、それは無い」

バイオハザードで真琴が怖がっている中、一人『汚物は消毒だー！』とか言いつつ火炎放射器を振り回し、アーケードゲームでは筋骨隆々のキャラクターで相手プレーヤーをボコボコに打ち負かす、ふと三人で待ち合わせしていれば死角から自転車で轢きに掛かり、プールでは抵抗する真琴の頭を押さえつけ冗談抜きで殺しに掛かる。こんな危ない“野郎”。真琴は女の子と認めるわけにはいかなかった。シンクロしたことから、岩崎も似たようなことを思っているのだろう。

男二人に女一人というより、男三人の集団だと真琴は思っていた。マジで。

「……なんか今、かなりひどいこと言ったよね」

「気のせいだ」

「だな」

肩に掛けたカバンを持ち直し、真琴と岩崎が歩き出した。

「つて、また置いてきぼりかよこの野郎！」

それを、ボストンバックを振り回しながら追う佐奈。

三人がはしゃぎ、周りの生徒が『なんだなんだ？』と振り返る坂道はあと少しで校門へとたどり着く距離であつた。

神奈川県立清ヶ丘高等学校は、京市の住宅街、そのど真ん中に造られた公立高校だ。京市ができた直後に建設され、十数年前に校舎が建てられた新しい教育機関である。

全校生徒は約六百人。学校としては普通であるが、住宅街に近いということで志望する中学生は多い。付近の中学生の大半がこの高校に入学するという、まさに『近所の高校』という存在であった。風紀もほどほどに保たれており、不良といえる生徒もいたが平穩そのものを体現する雰囲気。

真琴と岩崎、そして佐奈はこの学校の一年生であった。

一時限目終了後の数分間の休み時間。三人は窓際にある真琴の席に集まっていた。

校門を通り過ぎても騒いでいた真琴達は、結局教師たちに怒られてしまったのだ。

「――佐奈がカバンを振り回さなきゃ、こんなことにはならなかったのに」

「そうだな」

怒られた理由は簡単だ。佐奈の振り回していたボストンバックが、教師の右肩に直撃したのだ。

そのまま三人まとめて説教である。授業開始が近づいていたため解放してもらえたが、頭に当たっていたらどうなっていたのか……考えるのも恐ろしい。

「あ、朝のことは忘れてよ。単に私の不注意だったんだから」

佐奈が引きつった笑顔で言う。ため息混じりに真琴は、

「その不注意で被害受けた俺はどうしろと――」

「だから忘れてよー！」

一度ならば忘れられるものなのだが、普段からカバンを振り回して周りに被害を与えている光景を見ているので忘れろと言われてもできない。

むしろ、このできごとは記憶に強く刻まれることになるだろう。

「てか、間の休み時間くらい休ませてくれ。頭が痛いんだよ」

そう言いながら、右で佐奈を追い払うような動作をする。

「そつえば昨日も言ってたよね？ 保健室に行ってきたら」

割と真面目な顔で、佐奈が言う。

謎の頭痛だった。昨日の昼頃からちようど痛みだし、それが今も継続しているのだ。深夜に課題を片付けた際にも頭痛はしており、地味に私生活に障害をもたらしていた。

「んー、でも今日はなあ……」

昨日も頭痛で保健室へと駆け込んでいる。流石に二日連続で保険委員のお世話になるのは避けたい。保険委員は佐奈なのだ、なんとなく遠慮してしまう。

「それに……、なんか特殊な感じがするんだよなあ」

「特殊？」

「なんか、胸の奥から頭に盛り上がってくる感じ。言葉で言いにくけれど、なにかが回ってるんだ」

「なにが回ってるんのよ」

「知らねえ」

病院に行くのがめんどくさいので放っているが、こんな頭痛は初めてだった。

もしかしたら、病気の兆候なのかもしれない。

「いや、もしかしたら知恵熱かも……？」

あれだけ苦労して課題を終わらせたのだ、もしかしたらそのせいののかも――？

それ以前にも頭痛はあったが、なんとなく真琴はそう思った。

「なにいつてんの？ 知恵熱って生後半年くらいの赤ちゃんに見られる発熱よ」

「……」

新しい知識を得た。すると、先ほどから携帯電話を触っていた岩崎が、突然真琴の頭を突いた。

「指で突くな」

なんだよ。と真琴が振り向くと、岩崎が携帯を差し出してきた。差し出された携帯の画面を凝視する。

『中国に巨大生命体出現、死傷者数千人以上。重慶市は壊滅状態か』

中国政府は昨日の巨大生命体の攻撃により、死傷者の数が数千人に昇ることを記者会見の場で発表した。内半数が一般市民と見られており、巨大生命体の攻撃を受けた重慶市はほとんどの建造物を破壊されたもよう。

また中国陝西省でも巨大生命体が確認されていたが、重慶の固体を合わせ国連軍が破壊した。（産経新聞）

「知ってるだろ？ 巨大ロボットの話」

岩崎が目を輝かせて言う。

「ああ……あのでかいのを破壊しているのは巨大ロボットっていう噂ね——」

それはそれなりに話題になってる、ちょっとした噂だった。巨大生物に対抗するために、巨大ロボットが運用されている——。

推測の域を出ないアホみたいな噂ではあったが、世界中にこの噂は広がっている。

『巨大生物を研究して開発した』やら、『ロボット技術の結晶』とか。

『日本が開発したスーパーロボットだ』と主張するオタクまでいる始末だった。

そのロボットが、この中国の騒動に関わっているのだろうか。

「これは近いぞ、もしかしたら日本にも現れるかもしれない」

「んな馬鹿な」

あくまで噂なのに、岩崎は嬉々とした表情で語る。確か巨大生命体は40m位の大きさだと聞いたことはあるが、そうすればそのロボットも40mの巨体を持つことになる。

人間大のロボットが精一杯の今の科学力で、そこまでのロボットが造れるとは思えなかった。

「私も聞いたことがあるよ。お姉ちゃんが『まるで「えはんげりおん」みたい』って言ってたし」

聞いた言葉をそのまま言ったためか、首をかしげながら佐奈が言う。

「確かに、エヴァンゲリオンみたいではあるな」

「大きさはな。けど、ほんとに存在するのかよ？」

噂だけが一人歩きしているようにも思える。それこそ、巨大ロボ
ットはサイエンスフィクションやアニメの中だけの存在である。

「さあな。実際、この目で見てみないと――」

「そらそうだ」

区切りのいいことに、二時限目を知らせるチャイムが鳴った。

二時限目の英語に落ち込みながらも、真琴は教科書を取り出した。

episode? 2・要塞都市?

シャープペンシルの書き殴る音が教室に響き、教師が流暢な英語を喋りながらチョークを扱う。時折数人の生徒が顔を上げ、黒板に書かれた英文をノートに書き残していた。

「この問題は――上原、やってみろ」

英語教師に指名された男子生徒が教壇まで向かう。チョークを手に取り、カリカリと黒板に書き上げる。

「そうだな、ここはこう解く。戻っていいぞ」

教師が納得したように頷き、次の例文を黒板に書いていく。

なんの変哲も無い、代わり映えの無い授業。いつもどおりに教師は黒板に問題を出し、それを生徒が解き、書き残していく。

ただ一人、真琴だけは机の上に突っ伏していた。

先ほどからの頭痛が治まらない。それどころか、今度は胸騒ぎまですしている。グラグラとなにかが駆け回る感覚に、真琴は倒れそうになっていた。

「――うう……はあ……」

頭がボーっとする。体を構成しているなにかが、逆流しているような感覚――。

その感覚は、なかなか収まらなかった。

「くっそ……、調子悪い……」

「真琴大丈夫？ 保健室行こうか？」

隣の席に座っている、佐奈が心配そうに真琴の顔を覗き込む。

「汗も出てるし、無理しないほうがいいって」

「……そうかも、しれないな――」

これ以上他人に迷惑を掛けることもないだろう。それに、こんな状態では授業どころではない。

流石にここまで悪化するとは思ってもみなかったが――。

「――ん、どうした伊藤、芳永」

気づいた英語教師が、手を止め振り向く。

「先生」、真琴——芳永君の調子が悪いみたいなので、保健室まで行っていいですか？」

真琴達とは会話する砕けた口調ではなく、佐奈がハッキリした物言いで教師に言う。

「そうか。そういえば昨日も体調が悪いと言っていたが……大丈夫か？」

「大丈夫……じゃないと思います」

昨日も保健室へ駆け込んだのは英語の時だった。人の良い教師なので勘違いされないと思うが、英語が嫌いで保健室に行っていると思われたら最悪だ。いや、実際嫌いなのだが。

「よし。伊藤、付き添いで行ってやりなさい」

心配している口調で英語教師が言う。真琴は佐奈の後を追う形で教室を出た。

真琴の歩調に合わせるようにして、佐奈が先導する。すぐ近くの階段を下り、保健室のある第一校舎を目指した。

今は授業中であることからか、廊下には人つ子一人いない。耳を澄ませば人の声は聞こえたが、不気味なほどに静かだった。

元々、保健室は教室とは別の第一校舎の一階に存在している。授業をしている教室は基本的に第二校舎にあるため、ただでさえ静かな廊下がさらに静まり返っていたのだ。

体育の時間なのだろう、校庭でサッカーをしている生徒の姿が見えた。ゴールネットが揺れ、得点が入る。

「……そういえば、五時限目はサッカーだったな」

太陽の光が差し込む静かな廊下で、真琴が呟く。体操着を忘れていたのを、思い出したのだ。

「そんな状態で参加できるわけないでしょ」

「……そう、だな」

校舎の端、職員室のさらに奥に向かう。

太陽光が真琴の目に入る、視界を白いつぱいに染め上げた。

光が、思考を染め上げ――。

『――あれ』

真っ白な光景。まるで雪が降り積もっているような、純白の大地。――おかしい、なんで……。廊下じゃ……。

ありえない光景が、真琴の目の前に広がっていた。学校は消え去り、先ほどまで歩いていた廊下はここには存在しない。それどころか、自分以外の人の姿すら見えない。

『そんな。なんだよ、ここ……』

目の前が真っ白に――いや、まさしく真っ白だった。本当に白しかない、そんな世界である。

ひざまずき、大地に手を当てる。

『――砂、だ』

それは雪ではなく、真っ白な砂だった。一粒一粒が決め細やかな、滑らかな砂だ。

それが一面を、この世界全体に広がっていたのだ。

頭痛と胸騒ぎは止まらない。だが、そんなことはどうでもいい。

『佐奈……佐奈は！？』

一緒にいた、女子生徒がいない。自分の目の前を歩き、付き添ってくれていた佐奈が。

目の前にいたのに――いない。

『佐奈、佐奈！――！』

声を荒げ、名前を呼ぶ。だが、その声に反応する者は誰一人としていなかった。

真琴が立ち上がり、駆け出す。このままひざまずいていても、事態は変わらないと思った。

フラフラと走り、辺りを必死に見渡す。

誰も、いない。それどころか、なにもない。

『どうなってんだよ……これ、ふざけるなよ……』

顔を引きつらせて、真琴は立ち尽くした。

——夢の中なのか。そうに違いない。だけど、砂を掴んだ感覚がある。

——気を失っているんだ。けど、意識はハッキリしている。

——頭痛がしているのに、なにが意識はハッキリしているだ。けど、夢の中だとはとても——。

『……ちよつとまで、落ち着け、れ、冷静になれって——。

考えようとしても意識が混ざり合うようにして、うまく考えることができない。頭で考えようとする、なにかが拒んだように考えを拒絶してしまう。

力無く、その場に座り込んで頭を抱える。なにか、なにか考えろと自身の思考を最大限に振り絞った。

『……そうだ、携帯電話——』

ブレザーの胸ポケットに入れておいた、緑色の携帯電話。それさえあればなんとかなるかもしれない。

確証は無かったが、なんとなくそう思った。

携帯を取り出そうと、胸ポケットに手を入れる。

『——う、ん？』

ブレザーの感覚、ワイシャツの、サラサラとした肌触り。

ベルトとズボンの柔らかい締め付け。靴の感覚。

無い。

服という感覚すら、無い。

代わりに着ていたのは、真っ黒の、まるでウェットスーツのような物であった。

『なんだ、これ——』

肩や太ももの部分が流動的に盛り上がり、背中にはバックパックのような、巨大な機械が取り付けられている。胸部にはプレートのような物が取り付けられており、なにかから守るように硬い。

そして——まるで体のラインをなぞるように形成されたライン。
奇妙なことに、その部分は白に光っていた。

いつの間に、こんな服を着ていたのだろうか？ さっきまで制服を——、着ていたのか？

気が付いたらこの服を、だけど着た感覚は——。

意識が混ざり合い、視界がドロドロになっていく。自分の存在自体があべこべになって、思考その物が侵食されたような。

『やめてくれよ——！』

そう叫ぶしかない。こうなってしまった理由はわからないが、とにかく、やめてほしかった。

エコーした声、感情的になって叫んでいるのに、どこか機械的な発声。

気が付けば、自分の声もおかしくなっていた。

その瞬間、空からなにか落ちてきて、真琴の体が吹き飛ばされる。小さな砂の粒が辺りに拡散し、擬似的な波を作り上げた。

体が衝撃に弄ばれ、砂の上を転がり続ける。

弾かれたような衝撃だった。真琴の体は、数メートル転がったところようやく止まった。

呻き声は、しなかった。違う、できなかった。先ほどの理解不能な出来事に、頭がパンクしかけている。

砂に埋もれた体を起こし、ヨロヨロと立ち上がる。

子犬のような、怯え、潤んだ瞳で、落ちてきた巨大ななにかを見上げる。

巨大な影が、真琴を見下ろしていた。

いや、影ではない。その巨大な影は明らかに実体を持ち、雄雄しく、そして力強い意思に溢れていた。

巨大な腕、引き締まった脚、胴体はか細く今にでも折れてしまいそうだ。反面、胸部はガッチリとしている。

頭は見えなかった。見下ろしているのだろうが、こちらからは全く見えない。

薄く光り輝く、美しいクリーム色の装甲。翼は無かったが、まるでその影を天使のように見せつけた。

『……やめて、くれよ。冗談は好きじゃない』
力無く呟くのが精一杯だった。

——現実だ。貴様は私と共に、戦う。人ならざる者を切る矛となり、人と対なす楯となる——。

——拒んでも、お前がお前を拒まぬ——。

——逃げることはできない。逃げようとしても、私が貴様を逃がさない——。

『やめろよ……。お願いだから、それ以上喋らないでくれ——』

——私は人の手により造られた、武装した妖精。神の王国の名を持つ——。

「——……!!!!!!???'」

代わり映えの無い廊下。窓から差し込んでくる光が、真琴の顔を明るく照らす。開いた窓から優しい風が舞い込み、汗ばんだ真琴の頬を涼やかに撫でていた。

「——よかったあ！ 無事だったのね!!!!」

涙をいっぱいに溜めた、佐奈の顔。泣き腫らしたのか、鼻は真っ赤になっでいて、肩で息をするほど興奮している。

「大丈夫か！？ へんなところは無いな!？」

肩を揺すり、真琴に詰め寄る岩崎。佐奈のように泣いた痕跡は見られないが、やはり興奮しているようだった。

「……ここ」

「保健室前の廊下だよ！ 真琴、いきなり倒れて……」

夢、だったのだろうか？ にしても、まるで現実のような感じだった。頭に手を当て思い出そうとするが、いまいちハッキリしない。結局、なんだったのだろう。

「まあ、よかった」

ホッとしたように、岩崎が言った。

だしかに、無事だっただけでもよかった。今は、そんなに深く考えなくてもいいだろう。

「——ああ……」

溜まっていた緊張が抜けていくようだった。現実に戻れた感動と、恐怖からの脱出。

なにも考えたくなかった。

「意識が戻ったのか！ よかった……！」

保健室の戸が開き、中から養護教諭が姿を現す。真琴のことを心配していたようであるが、なにか別のことで慌てているように見える。

「……なにか、あったんですか。先生」

教諭の顔を見上げ、真琴が呟く。

「避難指示が出たんだ！！ 巨大生物が来る……！」

気が付けば、甲高い避難警報のサイレンが辺りに鳴り響いていた。

episode? 2・要塞都市?

人の気配が無くなった廊下。生徒達の騒がしすぎる声は聞こえず、かわりに避難指示のサイレンが小さく聞こえる。照らすはずの電灯は全て消え、昼間にも関わらず廊下はしつとりと、暗くなっていた。真琴と岩崎、佐奈と養護教諭は、真琴を支えながら学校近くのシエルターを目指していた。学校の全校生徒全員を収容しても有り余る、巨大な地下シエルターである。

「ちょうど真琴君が意識を失った時だ。街中でサイレンが鳴って、シエルターに非難するように伝えられた」

真琴に肩を貸している養護教諭が、真琴に向けて静かに言う。その歩調は、緊急時であるというのに落ち着いている。真琴の体調を気遣ってでもあるだろう。

実際、真琴の頭痛は納まっておらず、今だ『グワングワン』と酷く揺れていた。

「君と、事態を知らせてくれた伊藤さん、それに岩崎君。それ以外の生徒は全員シエルターに非難した。突然意識を失ったって聞いたものだから、動かすことも出来なかったんだ。勝手な判断だったが、そのままの体勢で意識が戻るのを待たせてもらった。すまない」

「せ、先生が謝ることじゃないですよ……」

賢明な判断だと真琴は思った。意識が無い人間を無理やり動かすというのは良くないとは知っている。そのまま意識を失っていたらと考えれば間違った判断だと思うが——現に真琴は意識を取り戻しているのだ。

「いや、もしこれで君達が大変なことに巻き込まれたら——私の責任だ」

おそらく、責任感の強い性格なのだろう。教諭が厳しい顔をしながら言った。

「けれど、まさか本当に日本に来るなんてな……」

岩崎の言葉で、真琴は一時限後の休み時間に、岩崎が巨大生物の話をしていたのを思い出した。話半分で聞いていたが、岩崎の予想はおおよそ当たっていたことになる。

「——まっ、地理的にも近いし、いつかこうなつてたんじゃないか」
実際、日本に来ているし。

「……家、大丈夫なのかなあ……」

佐奈が心配そうに呟く。もし、巨大生物が住宅街にまでこれば、無事では済まないであろう。

「大丈夫だ。自衛隊が守ってくれる。だから今は、落ち着いていよう」

そんな佐奈を落ち着かせるように、養護教諭が話す。

職員室を通り過ぎ昇降口へと続く広いフロアを抜ける。上履きを脱ぎ靴に履き替え、サイレンの鳴り響く街へと飛び出した。

校舎に遮られていた太陽光が一同を照らす。

校門を出たところで、岩崎が口を開いた。

「——静か、だ……」

警報の音はうるさい。だが、人の営みが確認できない。全ての民家に人がいないようだった。不思議なことに、先ほど真琴の頬を撫でた風もピタリと止まっている。

「……人が見えないわ。みんな、シエルターに行ったのかしら」
それ以外に考えられないが、たしかに人の姿が見えない光景は、街の景色としては不自然だった。

「——とにかく、シエルターに向かわないと」

教諭に体を預けた真琴が、小さな声で呟いた。

「そつだな……、坂を下った先に学校指定のシエルターがある。君たちの担任がシエルター前にいるはずだからすぐ分かるだろう。行こう」

教諭の言葉に頷き、岩崎が先に行く形で佐奈、そして教諭と真琴と続く。

空には灰色の雲が掛かり始めていた。

黒。

光の通らない、絶対的な色。なににも染まらず、ただ、自分に合わせようとする色。

全てを許容し、光にもなれば闇にもなる白とは対極の存在であった。人類の戦争行為は、全てこの二色に収まってしまふのかもしれない。

その内の一極。それが、黒だった。

地球のおおよそ1/3を埋め尽くす、巨大な海、大西洋。そこもまた、黒に支配された漆黒の空間であった。

いや、黒ではないのかもしれない。太陽の白が表面を照らし、その残光が海中を穏やかに染め上げる。その色は藍色だ。蒼海をいっそう綺麗に輝かせる、おぼろげな光り。

だがしかし、人間にとって海は未知の空間である。宇宙と同様、人類の侵入を拒み続ける、気高き城だ。

それはある意味、“黒”であると言えた。

その蒼海——黒の海を——巨大ななにかが泳いでいた。海に溶け出してしまいそうなほどの影に包まれ、異様な雰囲気醸し出している。

優雅に泳いでいた魚が巨大な影を避け、仲良く遊んでいた群れはバラバラに分解される。海の流れさえも、その巨大な影から逃げていくようであった。

巨大な人類の敵。全ての人間を虐殺する、悪魔の生物。

——ヨトウン。北欧神話の霜の巨人は、静かに、日本へと近づいていた。

episode? 3・インビシブル・リアル?

3・インビシブル・リアル

雲の切れ間から覗いた太陽が海中をいつぱいに照らしあげ、鮮やかなマリンスブルーの情景を作り上げる。優雅に数百匹の魚の群れがその光景の中で踊りキラキラと銀色に輝いてみせる。海面の波によって屈折した光りが、幻想的なまでの光景を生み出していた。

ヨトウンのいる、黒の海とは明らかに異なる情景だ。海中からも空が見えるということは、海面の近くなのだろう。人間が普段目にする、一般的な海の光景だ。

その場に、不釣りあいであろう巨大な建築物が二つ存在していた。ヨトウンの全高をはるかに超える大きさ。ヨトウンのそれに比べシンプルな外観は、ヨトウンに負けず劣らず漆黒に塗装されていた。

そうりゅう型潜水艦。海上自衛隊が運用している、非気依存推進潜水艦である。水中排水量4,200tを誇る、現在運用されている通常動力潜水艦の中では世界最大級の艦だ。

葉巻型のシンプルな構造、それまでの潜水艦の流れを正統に取り入れた、堅実な設計。SFなどで見られる、複雑な外観ではないがそれでも完成尽くされた安全性で満ち溢れていた。現在は一番艦である　そうりゅう　。同型艦である　うなりゅう　、　はくりゅう　、　けんりゅう　が日本近海で運用されている。

二つの巨大な建造物は、この内の二隻だったのだ。

その内の一隻——SS-502　うなりゅう　の前部、六門の魚雷発射管扉の全てが静かに開く。流れの乱れた水流が発射管扉の前で渦巻き、微細な波紋を　うなりゅう　の前方に描き出す。

続くように、　うなりゅう　の左後方を航行していたそうりゅう型潜水艦四番艦　けんりゅう　の魚雷発射管扉も同じように開く。

この二隻の潜水艦は、日本に接近している巨大生命体——ヨトウンの迎撃を命じられていた。他にも付近を航行中の船舶も存在するが、偶然にもヨトウンの予測移動地点を航行中だったこの二隻に、先制攻撃の命が下されたわけである。

最新の被害予想では、日本に接近しているヨトウンが首都圏を直撃することは間違いないと予想されていた。

まず、神奈川県から上陸し、東京都を横断したのち、埼玉県へと侵入する。その後は気分に任せるまま首都圏を蹂躪。

最低でも数百人の人命が失われることが推測されている。21世紀の日本における災害の中でも、最大級の災害であろう。なんと少しでも、ヨトウンを破壊する必要があった。

うんりゅうの魚雷発射管から、二本の魚雷『89式長魚雷が』発射された。数秒送れて、けんりゅうからも同形の魚雷が発射される。

気泡の尾を引いて、長大な、そして爆発的な破壊力を持つ魚雷がヨトウンに向かって突き進む。

数分後には、魚雷がヨトウンに命中している。

平均的な会議室程度の大きさの一室。段々畑のような構造のそこは、巨大な機材に囲まれて、正面に薄暗く光るモニターが飾られていた。

暗い室内だ。最低限の光源は存在するが、どれも小さな電飾からのもので最低限を維持するほどではない。基本的に床は暗く、歩けるのも怪しいくらいであった。

段の最上部。その真ん中にポツリと置かれた椅子と机に、一人の男が座っていた。

若い男だ、年齢は二十代後半であろう。ワックスでキツカリと固めた頭髮がわずかな光りで照らされている。全身を黒のスーツで身を固め、真面目そうな印象である。

今のこの状況、男の立場。焦っていてもおかしくはないのだが、男は不気味なほどに落ち着いていた。

「海中すら行動可能、か……」

これまでのヨトウンは地上、空、そして海上で確認されていたのだ。だからこそ——わざわざ避けていたから——海中は行動不可能だと思い込んでいた。

そのため、数少ないレーダーシステムを陸地に当てていたのだ。元々海中ではレーダーが有効に使えないという事情もあったが、いずれにせよヨトウンは海中に現れないと考えていたからだ。

だというのに——。

「海自のそうりゅう型潜水艦、SS-502、504。魚雷の発射を確認しました——！」

段の最下部で機材を操っていた女性が言った。男がそれを聞いて深いため息をつく。

結果は、わかっているのだ。

「ヨトウンに攻撃が効かないことくらい、分かっているはずなのに」

それでも、国としての威厳は守りたいのだろう。それはどこの国も同じだ。

しかし、意味が無いと分かっているながら出撃した、潜水艦の乗組員はどうなるのだろうか。彼らも国を守りたい、家族を守りたいという信念を持って出撃はしているだろうが、これではただの生贄だ。——黙って私達に任せていればいいものを——。

ただ、“こちら側も”問題が山積みだった。

「クレードルは？ どちらか一機だけで良い。それだけでも日本に向けられないか」

巨人を唯一運用し、ヨトウンに対して最も効果的な攻撃を与えられる組織——。それが男の所属する組織だ。ヨトウンの現れた国に巨人を送り込み、国軍ですら手を拱く生命体を的確に、確実に破壊する。

この組織に、民主主義、社会主義、資本主義、共産主義は関係ないのだ。とにかく、確実にヨトウンを破壊することだけを求められる。

「——待つてください。来ました」

下層でキーボードを操っていた女性がその手を止める。データを送ったようで、男の正面にある小さなディスプレイに複数の図面と、中国北部の地理が表示された。

クレードル。巨人を輸送出来る、唯一の航空機。『ゆりかご』と名付けられた漆黒の輸送機だ。中国北部のヨトウン、総勢五体の破壊に成功して、現在は天津市に向かっているはずだが——。

「——無理か」

目の前のディスプレイを凝視して、男が呟いた。

致命的に時間が足りない。日本にヨトウンが上陸するのに最長で八時間、最短で五時間だ。巨大な巨人を搭載したクレードルは、必然的に旅客機より遅い。さらに燃料の消費も早いため、いくつか中継地点を経由しなければいけないのである。

八時間といっても、これは自衛隊の足止めによって大きく変わる。うまくいけばもう少し伸びるかもしれないし、最悪五時間以内で上陸されることもあるのだ。

だが、足止めをしたところで、今の組織に迎撃できる戦力は存在していない。

二体を除いて、だ。

「だとすれば、——は無理か。……あの機体なら、あれなら搭乗者が近くに、それもすぐにでも出撃できる位置にいるな」

二体のうちの一体は、現在九州に単独輸送されており輸送には莫大な時間が掛かるだろう。すぐには戻ってこれない。

だがもう一方の巨人は、施設の地下、格納庫に今も格納されている。準備さえ整えれば、今にも出撃できるだろう。

「――芳永に搭乗者の迎えに行かせよう。整備班を第二ハンガーに向かわせ初期状態で待機させておけ。それと防衛省に連絡、『こちらで対処する』と伝えていてくれ」

男にとって、それなりに“想定”されていた事態ではあった。流石に海中から現れ、余裕のないときに来られるとは思ってもみなかったが。

しかし、いつかこうなるとは思っていた。

肩を揉みながら立ち上がる。そして付近にいた男性に、

「私は、外の空気を吸ってくる」

そう言つと、後方の扉から廊下へ出た。

男の足音だけが静かに響く、LED照明のみで照らされていたそこは、清潔感の漂う廊下であった。白を基調に塗装されているため、どこかの総合病院のフロアのようにも思えるが、病院ほどここは人々に認知されておらず、ある意味で血生臭いところではあると男は思っていた。

無意味に明るいい灯りが眩しいほどに廊下を照らし、男の黒のスーツさえ煌かせる。

緑の非難口誘導灯から、廊下外へと出た。

冷たく、体を斬るような鋭い風が男の体を包み込む。廊下ほど明るくないその場所は、無機質なコンクリートの素肌のせいで、むしろ寒くも思えた。

そこは駐車場だった。かなりの数の車が停められるだろう、奥までかなりの距離がある。辺りのショッピングモールの駐車場とは比べられないほどの巨大さだった。

エンジンを始動した車が付近にいるのだろう、駐車場はその車のエンジン音でやかましい破裂音を響かせていた。

スーツのポケットから携帯電話を取り出し、おもむろに電話帳を開く。ポチポチと操作すると、耳に携帯を軽く当てた。

「……」

飾り気のない、簡単な呼び出し音。二、三度呼び出し音が続き、一人の人間が電話に出た。

『——結局、戦わせることになるのね。三人で回していけると思ってたんだけど』

若い女性の声だった。親しい人物なのだろうか、特に遠慮することなくすぐに会話を始める。男もそのことは気にする様子はなく、「いつかこうなることは分かっていただろ？ ヨトウンを破壊して、減らすことが出来ない状況では増える一方だからな。むしろこれを境に状況が変わるかもしれない」

『かもしれないけど……。素人を出撃させるなんて、こうなるんだったら早いうちから訓練させてけばよかった』

「一から説明すれば、それでいい。アレを見て、『乗りたくない』という子供はいないさ」

『それに、嫌でも乗せる』

「そのとおり」

車のエンジン音がいつそう大きくなり、腹に響くほどの爆音が男を揺らす。

『……じゃあ、行くわ』

唐突に電話が切られ、一定感覚の電子音だけが男の耳に残る。そのおり、タイヤと道路の擦れる微音が男に聞こえ、一台の車が目の前を通り過ぎた。

「見送りにしては、少々短すぎたか」

どうせ帰ってくればまた会えるが、なんとなく名残惜しい。

舞い戻るように、男は廊下へと消えていった。

爆発。海中が震えるように共鳴し、細かな波動と気泡を出現させる。あたり数百メートルが気泡の壁に包まれて、一時的に視界を失う。

付近を泳いでいた魚類は、その衝撃で即死した。水の不規則な流れに体を揉み砕かれ、プカプカと海上に浮き上がる。

潜水艦が発射した、魚雷だった。それが、ヨトウンに命中したのだ。

気泡の壁は収まらない、ヨトウンの40mもの巨大な体を全て多に尽くしている。海上からそこを見れば、その部分だけ異様に白色化しているだろう。

魚雷は一発だけではない、うんりゅうの放ったもう一発の魚雷がヨトウンに命中し、けんりゅうの魚雷も立て続けに命中する。

普通の艦艇——あるいは生物ではこの攻撃で生きてはいられないだろう。付近の魚は一瞬のうちに絶命している。数発の魚雷は、間違いなくヨトウンに命中していた。

気泡がようやく収まり、辺りの状態が目に見えるようになる。ヨトウンの四肢はこの破壊力の前にバラバラに——、

——なっていない。なにも変わっていない、無傷にも見える。潜水艦の攻撃は、全くの無意味であったのだ。

頭部の赤い発光体がグリグリと動き回り、うんりゅうとけんりゅうを視界に捉える。

『遊んで、遊んで』

そう言ったみたいに、ヨトウンが四肢を振り回し、二隻の潜水艦に接近する。海中の負荷を全く無視したような、驚異的な速度だった。瞬く間に潜水艦との距離を縮める。

その巨大な腕で、うんりゅうの船体を叩き折った。飽き足らず、うんりゅうの残骸を蹴り飛ばす。オイルとも血ともとれる液体が、海中を漂った。

けんりゅうも見逃さない。逃げるように背を向けたけんりゅうを、その腕で捕まえ抱き寄せる。

船体が軋み、ひしゃげる。

そのままけんりゅうを抱き潰した。おそらく、いや、間違い

なく、けんりゅう 内の船員は悲鳴を上げて死んだことだろう。
残骸を放り捨て、ヨタウンが満足げに辺りを見渡す。やがて、新しい“おもちゃ”がないことに気づくと、再び日本へ向けて泳ぎ始めた。

数分後、防衛省に うんりゅう、けんりゅう 轟沈の報せが届いた。現状の戦力では歯が立たないことを改めて知らされた日本政府と自衛隊は、その戦力を温存する構えをとる。それでも、一部の愚かな政治家は攻撃し続けることを望んでいた。

組織に、防衛省からの電文と命令が届いた。

「……以外に早かったな、もう少し粘ると——思っではいたが」
駐車場から戻った男が、自分の席に座って電文を読む。

「日本政府だって、こんなあつさり海中戦力を失うなんて思ってもみなかったんじゃないんですか？ 私だったら泣いて逃げますよ」
缶コーヒを飲みながら、下層の女性が言った。

日本は地理的条件上、これまでヨタウンの被害を受けていなかったのだ。安全な場所にいる以上、もう少し感覚が鈍くてもおかしくはないが——。

「まあ、怒り狂って攻撃を続けられるより、逃げてもらったほうが楽ではあるかな」

「ですね」

どちらにせよ、日本に上陸した瞬間、ヨタウンを破壊する。たとえどんな手段を利用してもだ。素人であっても、必ずヨタウンを破壊してもらおう。出来ないと困る。

「ところで翁野さん？ 新しいパイロットはなんて名前なんですか？」

缶コーヒの缶をゴミ箱に放り捨て、女性が振り返る。

「——芳永、真琴君だ。なんでも結子の弟君らしい」

電文を見ながら、男——翁野裕樹おののゆうきが答えた。

episode? 3・インビシブル・リアル?

——聞いた!? 中国に現れた例の怪物、こっちに向かって来てるらしいよ!——。

——やつぱり! それで避難の指示が出たのね!——。

——まさか、この街に来るなんてこと無いよね……——。

——嘘——!! 来ちゃったらどうしよう!——。

——来ちゃったらどうすんのよ!——。

——キャー! どーしょ!——。

避難してから、すでに一時間以上が経過しようとしていた。警察や自衛隊の人間は姿を現さず、清ヶ丘高校の生徒と教職員だけが、シエルターに避難していた。市の職員数名がシエルター内の確認をするために来たが、その職員も状況を理解していないのか全く話が進まない。状況は混乱の一途を辿っていた。

巨大な体育館ほどの大きさの、地下に建造された飾り気の無いシエルター。清ヶ丘高校の全校生徒を収容しても空きの出来る巨大なスペースは、悲鳴とも歓喜とも取れる声で溢れていた。同年代の集団が、狭い室内で静かにしてられるほうが難しいのだ。初めてのことで、実感が無いということもあるのだろう。ほとんどの生徒が親しい者同士で集まり、騒いでいた。

巨大な生物が自分達が住む街に向かってくるといっても、実際のその巨大生物を見たものなどない。シエルターが存在しているといっても、それは本当に大変なときだけであり、シエルターの場所を知らない人までいるのだ。全員がニュースや噂で知っているのみであり、それは、この街に住む住民全員がそうであった。

教師が市の職員となにかを話している姿が見えた。教師達はひどく混乱しているようで、生徒の前であるというのに慌てふためいている。一方の職員も、教師達に向かって必死になにかを伝えている。

その光景を、真琴達はシエルターの隅で観察していた。

「……………」

真琴の頭痛はまだ収まっていなかった。かろうじて動くことは出来たが、頭痛と共に現れていた症状は、未だ真琴を襲っている。本来なら病院に行くべきなのだろうが、この緊急事態では外に出ることも出来ない。幸い体調は徐々に回復していると判断され、皆と同じシエルターへと逃げていた。

夢のことを、必死に思い出そうとしていた。どうしても、夢の内容が気に掛かる、思考がドロのように溶け出したあの感覚……。なにか忘れてはならない、不思議な雰囲気にも思えたのだ。気になっしょうがない。

――。

思い出そうとしても、記憶が浮かんでこない。まるでシャッターが閉じられてしまったように、記憶が完全に閉じられてしまう。まるで、混濁した記憶の中を泳ぐようだった。自分の中のもう一人の自分が、意図的に記憶を閉ざしているような――。

「はい」

突然、目の前にラップに包まれた紡錘形のパンが差し出された。焼きそばパン。昼に食べようと思い用意していた、学生必須の品。コッペパンに焼きそばを挟んだだけの、簡素な物だった。

「芳永、食うか？」

あつけにとられる真琴を尻目に、岩崎が言った。

ブレザーを脱いだ、ワイシャツとズボンだけの姿。今は壁に背を預け、他の生徒と同じ様にリラックスしている。岩崎の隣には、同じ様に佐奈の姿も見えた。

――目の前に置いてあったカバンから、気づかれずに焼きそばパンを抜き取るとは。こいつは忍者か、それとも、どこかの諜報員か――。

「もうこんな時間だし、そろそろ食べたほうが落ち着くと思うぞ」
「……いや、まだ腹減ってないし、後で食べる。ってか、勝手に人の私物を漁んな」

岩崎から焼きそばパンを奪い取り、カバンに再び戻す。元気が無いことを心配してのことなのだろうが、食べられそうにない。傍らの時計は十二時過ぎを知らせていたが、空腹は感じていない。

なんとなく、時間が過ぎていくのが早く感じた。

仰向きに寝転がり、天井を見上げる。シエルターその物は使用されていない新品の状態なので、天井は汚れ一つない、真っ白な状態だった。LED照明が顔を照らし、思わず目を細めた。

「自衛隊、とか……そんなんは動いてんのかな」

日本を守る、専守防衛を基本とする組織、自衛隊。その戦闘能力を疑問視する声も多いが、日本の防衛能力の集大成であることは間違いない。

日本にヨトウンが向かっているのなら、当然自衛隊も動いているはずだった。

「——動いてるだろうなあ……。だが、ここからじゃなにも分からん」

真琴の問いに、岩崎が天を仰ぎながら答える。真琴と同じ様に、目を細める。

他の県や近隣都市にも情報は伝わっているはずなので、すでに全国区のニュースになっていることは間違いないだろう。ただし、携帯電話から得られる情報は多くないため、シエルター内では正確な情報などは分かり辛い。これほど情報が得られないことが辛いとは思ってもよらなかった。

「それに、あんな巨大な生物相手だ。世界中の軍隊がああ生物に苦戦して、やられてる。もしかしたら尻尾を巻いて逃げたか——」

「いやなこと言うなよ……」

あの巨大生物が現れて数十年という時間が経過しているが、未だ世界中の軍隊は対策を練ることも出来ず、無様な攻撃を続けている。

特に、アメリカやロシアは被害を最も受けており、軍部は厳しい立場に立たされていると言われるほどだ。

それに次いで被害が多いのが中国、エジプト、中東各国である。中国は人口の多さから何億人もの死者を出しており、最盛期の半数までにその人口を減らしている。

それでもなお現在まで人類が生存しているのも、第一に巨大生物の不可解な動きによるところが大きい。

積極的には都市に進行せず、わざと人気のないところを狙っているように大陸を歩く。その進行速度は非常に遅く、自動車で追走できるほどである。

その動きも全く予測が出来ない。時折立ち止まったり、それこそ歩いてきた方向を戻りだす始末である。最悪その場所から何日も動かず、数日が経過した後歩き出したという報告もあった。そのため、巨大生物の動きを事前に察知し攻撃することとも可能であったし、早い段階で避難を終えることも出来ている。

最も、動きが遅いからといって対応が容易になるというわけではない。都市に現れた巨大生物は、その緩慢な動きとは予測も付かないほどの甚大なる被害をもたらすのである。

尻尾を巻いて逃げる——それも正しい判断かもしれない。

「これまでの戦いから結果は分かりきってるだろ。アメリカやロシアほどの軍事力も持たないし、兵力や士気においてははるかに下回ってる。それに政府も腐りきってるから対応も遅れる……」

「もしかして、自衛隊が現れないのもそれが理由か？ 逃げ出したから、戦うのは無駄だからってか？」

「いや、それは違うと思うぞ。国民を置いて一目散に逃げ出せば——それこそ非難的だ。なんとかして避けたいところだろうな」

「……じゃあ、なんで」

巨大生物相手に、人類が戦い続けられている理由。

「なにか大きな対抗策が……例えば、巨大ロボットとかな」

「……それって、あの時話してた中国に出たロボットの話？」

『巨大ロボット』という単語に反応したのか、単に会話に入り込めなかったのか、先ほどから話を聞いていただけの佐奈が突然会話を割り込んできた。

「当然確証は無いけどな。だけど、巨大ロボットが運用されているのなら巨大生物を破壊することも可能かもしれない。被害を抑えられていないところを考えると、運用数はそう多くなさそうだが」

「なるほどー」

「おい、岩崎。ということは巨大ロボットが本当に存在していると思っっているのか？」

「芳永は存在していないと思ってるのか？」

「当然だろ。そんな巨大なロボット、存在しているはず無いじゃないか」

それこそ、SFの世界の話だ。そもそも人間の形をして、なおかつ何十メートルもの巨体など、兵器として役立つ大きさではない。実現することすら出来ない。

兵器という物は、一般の人間が思う以上に繊細な機械なのだ。運用する地域や条件をしっかりと把握した上で設計を行い。兵器その物の方向性からぶれないよう開発を進める。技術的問題もしっかりと検討しなければいけない。古過ぎる設計ではその時代におけるニーズに答えることも出来ないし、逆に最新技術の結晶ならば量産にも適さないし、なにより人員の育成に大きな支障が出る。常に時代というものの流れを読んだ上で造らなければいけないのだ。

なにより人型ロボットにおいて問題なのが、その形からくる前方投影面積だった。戦車のように車高が低いわけでもなく、高速で動けるわけでもない。車両に比べ構造が複雑なのも問題である。必然的に間接に負荷が掛かるその設計では、戦場に出れるどころか、歩行すらも危ぶまれる状態なのである。

なにより、巨大生物の全長は40mと言われている。そうなると、

その巨大ロボットは巨大生物と同じくらいの全長が必要になると思われるのだ。

その巨大ロボットは立つことすら出来ないだろう。

「巨大ロボットの噂はあるけど、どれも噂の域を出ない都市伝説レベルのものじゃないか。ふざけてるとしか思えないな」

「その都市伝説を、世界中の人間が噂すると思うか？　こんな絶望的な世界で、そんなふざけたような噂を垂れ流すか？」

巨大ロボットが戦っているという噂は、世界中で騒がれている。噂ではあるが、その存在はほぼ判明しているとも言っているかもしれない。『実際に見た』という人間が現れるくらいである。

しかし、これだけ騒がれていても、巨大ロボットの姿が世間に現れたことは一度もなかった。『見た』という人がいても、それを証明する写真は存在していないのだ。合成写真などが出回ることもあったが、全てが合成であることを見破られている。

実際に見た人間はいるのに、その姿が晒されたことはない――。

巨大生物以上に不思議な存在が、この巨大ロボットだった。

「いや、別にそうは思わないけど……」

「40mの巨大生物がいるくらいだ。巨大ロボットがいても、おかしくはないさ」

「そーだよ。もしかしたら本当にいるかもしれないし、それが世界を守ってくれてたらで凄いことじゃない！」

「……まあ、な……」

――守ってくれてるなら、面白い世界なのかも知れない――。

アニメや漫画の世界。巨大ロボットが戦う世界。

どちらにしても、見たことのない巨大ロボットなど分かるはずもなかった。

「一体、これからどうなるんだろうな……」

少なくとも巨大生物がこちらに向かって来ているのは事実であるし、自分達の身が危険なのも確かだった。

「――守ってくれることを期待するよ」

静電気が走ったかのように、頭が痛んだ。

episode? 3・インビシブル・リアル?

十二時を過ぎた京市は、まるで都市そのものが死んでしまったように、静まり返っていた。すでに市民全員の避難が終わり警報自体も鳴っておらず、透いたような風の音が不安げに都市を見下ろしているのみである。

人の姿が見えない住宅街、巨大な複合施設は時間が止まったかのように静まり、時折吹く風が道に転がっている紙屑を寂しげに巻き上げるだけで、人だけでなく、木々に住まう鳥達の姿も見えず、生命その物がこの都市から消え去ったようである。動きというものが無くなってしまったこの街は、まるで一つの油絵のように、その印象を変えてしまっていた。

無音、無色。絵に描かれた、平らな街の情景。

その無音の空間を、一台の白い自動車が走っていた。突き抜けるようなエンジン音を街に響かせ、住宅街の路地を器用に駆け抜けている。他に走行している車は存在していないため、その存在は明らかに浮いていた。

前後に長い、ロングテールの車体。車高が異様に低い外観は、一般の乗用車には見られない特徴である。スポーツカーと呼ばれるジャンルの車であることは間違いないが、その排気音は間違いなく、ガソリンエンジン独特のものだ。全ての車種でエコカーと呼ばれる電気自動車が主流の現代にいて、ガソリン車が一般道を走行することとは比較的珍しい光景だった。なにより、このスポーツカーは時の冬 直前に生産を終了している。

ホンダ・NSX。本田技研工業が1990年から2005年の間に生産していた、三十年も前の旧式のスポーツカーだった。そのスポーツカーが、何故か京市の住宅街を疾走している。住民全員が避難し終えているはずなのに、だ。

路地から2車線の道路に飛び出し、タイヤの跡がハッキリと残る

ほどの激しいドリフトで右折する。急速に速度を落とすと、ある施設の入り口で急停車し、そのまま車のエンジンを切った。

運転席側のドアが開き、中から女性が出てくる。その女性は荒々しくドアを閉めると、不機嫌そうにある一角を見た。

どこかの研究員のような、ボサボサの白衣。白衣の下に来たワイシャツとスカートは微妙にくたびれ、目の下には薄っすらと隈が浮かんでいる。背中まで伸びる長い髪は幸いにも綺麗であったが、薄いメイクと隈のせいで少々不気味である。170cm後半はあるであろうその身長が、さらにその雰囲気大きくしていた。

悠然と輝く太陽の光を浴び、運転手である女性は苦しそうに目を細める。苦しそうな表情のまま、なにかを探すように右手で白衣のポケットの中を調べると、所々塗装の剥げた、オレンジ色の携帯電話を取り出した。画面を表示させると、そこに映し出された現在の時刻を確認する。

五月十四日 午後一時四十三分。

「――さて」

ふたたび携帯をポケットに入れ、力を抜くように一言、ポツリと呟く。無造作に両手をポケットに突っ込むと、先ほど見つめていた一角に向けて歩き始めた。

雨除けと、囲むように造られた壁。まるで地下鉄への入り口のような、地下に続く階段がそこに造られていた。

地下に続く、簡素な階段をゆっくりと下りる。既に日の光は遮られ、控えめに点いているLED照明の光が薄っすらと足元を照らしている。

10mほど下りたところで、階段は途絶え、堅牢な鋼鉄の扉が目の前に現れた。

京市に一定間隔で設置されている、地下シエルターへの入り口だった。最新の指紋認証システムを兼ね備え、外からはあらかじめ登

録してある人間にしか開けられない、非常に強固な構造の扉である。京市では、全てのシエルターにこのセキュリティシステムが採用されている。

指紋認証システムのカバーを開け、設定されているはずの、8桁のパスワードを入力する。液晶に『CLEAR』と表示された後、人差し指を指紋認証装置にあてがった。

静かに、扉のロックが解除される音が聞こえ、自動的に扉が開く。シエルター内の薄暗い光が、女の顔を染め上げた。

鋼鉄で出来た、重たげな扉がゆっくりと開き、冷たい風が室内へと侵入してくる。暗く陰湿な空間で冷やされた風は、室内の温度とは明らかに反するもので、出入り口の近くにいた人間は、すぐにその異変に気づいた。

市の職員で無いことは、誰が見ても明らかだった。そもそも職員は説明のため最初から同伴しており、これ以上職員の数が増えたところで意味は無い。職員がなんらかの理由で呼び寄せた可能性もあったが、外から扉を開ける権限を、一般の職員は与えられていなかった。権限は想定以上の問題が発生した場合に限られているのだ。それ以外の状況では、限られた人間にしか開けることはできない。

職員があっけに取られて、身動き一つ取れない状況で、ボサボサの白衣を着た女性が平然と、何食わぬ顔でシエルターの奥へと歩き始める。自身へ集中する目線が気にならないのだろうか、それとも気づいていないのか。顔色一つ変えていない。

ややあつて、一人の市職員が長身の女性に向かっていた。

「……あのー、ここは関係者以外立ち入り禁止なんですけど。もしかして、県のほうの役員かなにかですかねー？」

四十代後半の、ややしわの目立つ男性職員が女性に確認する。ハッキリしない物言いなのは、女性がどこに属しているのか分からないからなのだろう。一般人ではないことだけは分かる。この非常時

にシェルター内に入ることが出来るということは、それなりの地位にいるということだ。——その衣類からは想像できないが。

「——いえ、政府の者です。緊急の用件でこちらに来ました」

「……せ、政府からですかっ！？ それはそれは……しかしまた、一体どうして!？」

「残念ながら、機密性が高いのでお話しすることは出来ません」

市職員の顔を見て、女性は吐き捨てるように言った。市職員を軽く押しのけ、近くにいた教職員へと近づく。向かってきた女性に対して、教職員は明らか動揺を見せた。

苦笑いをしながら『なにか?』と尋ねる。

「緊急なので手早く済ませたいのですが」

「は、はあ」

そんな不自然な態度を取る教職員など気にもせず、女性は言葉を続けた。

「芳永、芳永真琴君っていう生徒、いますよね? 呼んで頂けますか?」

笑いもせずに、女性が告げた。

「……芳永。——一年二組の芳永真琴」

生徒指導の教師の声が聞こえ、生徒達のザワザワとした囁き声が大きくなる。真琴のことを知らない生徒は『誰?』といった風に『芳永真琴』という生徒のことを周りの生徒に尋ね、逆に知っている人間は真琴を見つけ、マジマジと真琴を見つめる。

教師が真琴の姿を見つけ、こちらに来るよう手招きをした。

「芳永、こっちに来なさい」

その生徒指導の声に釣られるように、頭痛で濛々とする体を立ち上がらせる。

周りの生徒の視線が真琴一点に集まり、『興味』や『好奇心』といった気持ちの悪い注目が真琴に注がれる。奇怪な物を見るような視

線だった。

白衣の女性。その姿に、見覚えがあった。というより、知っている顔だった。それも、ごく身近な、親しい人間。この場所で、合うはずの無い人間。

疑問と不安が体中を駆け巡り、急激に高まっていく。頭痛のせいもあるのだろうが、体全体が熱くなっていくことを真琴は感じた。

「……真琴、知ってる人？」

佐奈が不安そうに聞いてくる。岩崎も、似たようなことを言いたそうである。

——知っているものにも——。

目の下にできた隈、長い黒髪、気づかないくらい薄いメイク。

そして、その顔立ちは真琴にとっても似ていた。

生徒の体を避け、生徒指導と一緒に突っ立っている女性の下へと向かう。近づけば近づくほど、その姿はハッキリとしたものになっていった。

待ち受けている女性と、対面する。

「……なんでここにいんだよ」

目の前に立つ、“姉”に向かって呟いた。

芳永結子——。血の繋がった、疑いようの無い、本当の姉弟。マ

ンシヨンと一緒に住み、日常を共に生活する、家族。

その姉が、どうしてこのシエルターに。それも扉を開けて入ってきているのだろうか。

隣で突っ立っていた生徒指導が『知り合いか？』と尋ねてきたが、真琴はそれを無視した。

「なんで、このシエルターに、それも途中から入ってきてんだよ。確か、一般人だと途中からだと入れないんじゃないかなかったのか」

京市の製薬会社に勤めている普通の社員、そのはずだ。実際その企業は存在しているし、真琴もビルの住所を知っている。

当然、一般の会社員である結子は、外からシエルターの扉を開けることは出来ないはずなのだ。なのに、平然と入ってきて、しかも

政府の役人であると言っている。

真琴が突っ撥ねるように言い放つと、女性——結子は難しそうな表情で答えた。

「一緒に来なさい」

「なんで」

「色々問題があるの。ここでは話せない。事情は外で説明する」

「だから一緒に来いって言うのかよ」

「そう」

「……分けわかんねえ」

そう言い捨てて、呆れたようにため息をついた。

分らない。外からは入れないはずのシェルターに平然と侵入し、市の職員には『政府からの用件』などと言って、自分には『一緒に来い』と告げる。こちらから分けを聞こうとしても『言えない』『問題がある』と言って話そうともしない。

目的の见えてこない、人を不安にさせる喋り方だった。

「分けが分からなくても、一緒に来てくれないと皆が困るわ。あなたがいないと、大変なことになる」

「……ちよつとまでよ、色々おかしいだろ。言いたくないけど、もしかしてどこかで頭でも打ったか？ 『大変なことになる』って、どう大変なんだよ。まるで俺が重要な人間かなにかみたいじゃないか。普通の人間だろ？ こんな状態で俺が必要って……馬鹿みたいだ」

「詳細を答えることは出来ないわ」

「なんでっ」

口調が強まる。周りの視線がさらに集中するのを感じて、思わず視線を落とした。小さく深呼吸をして、自分を落ち着かせるようにゆっくりと、再び喋りだす。

「……じゃあ、一つ聞くけど。なんで俺が必要なんだよ。断片的なことでもいいから教えてくれよ。決定的ななにかを……なあ」

製薬会社じゃないことは明らかだ。そして、政府の関係者。そう

言っている。

それは分かった。だから、せめて自分が何故必要なのかを、少しだけでいいから、教えて欲しい。おかしい状況なのは確かなのだ。これ以上周りの目線を浴びて立ってられるほど、俺は強心臓じゃない。なにより頭痛が酷い。倒れそうなほど目眩がする。とにかく座りたい。納得できる言葉を聞かせて、落ち着かせてくれ。

頭痛が襲ってくる。それに、周りの視線が集中して妙に恥ずかしい。頭痛と平行して、今にも倒れこんでしまいそうだ。

姉に対して色々言いたい衝動を、どうにかして抑える。

真琴の反応を見ても、結子はその表情を崩さなかった。実の姉弟のはずなのだが、その言動や応対は、あまりにも冷たい。私生活とでは、印象が違いすぎる。

この雰囲気の原因は一体なんなのだろうか。自分の姉が、遠い存在に思えてくる。それも、物理的に遠いような感覚。

戸惑いを隠せない教師達がオドオドしながらこちらを見ている。

生徒も似たような反応をしており、岩崎と佐奈も、不安そうにこちらを見ていた。周りがただ見ているだけの沈黙は実に数秒間にも及び、遂に、真琴は我慢が出来なくなってしまった。

「——なんで俺が必要なんだよ！」

真琴が言った瞬間、

「頭痛」

結子がポツリと呟いた。

「聞こえなかった？ 頭痛よ、頭痛。もう影響が出ていてもおかしくは無いはずよ」

予想していた答えとは、まるっきり違う言葉だった。啞然としながらも、真琴が反論する。

「……ハッ、どこがここに来た理由なんだよ。俺の表情とか見てたら大体——」

「見せられたんでしょ？」

「……」

「イメージの中に現れた『アレ』を。自分よりもはるかに巨大で大きな『なにか』が、目の前に。妄想や夢じゃなくて、『実体』が見ているはずよ、確実に」

なんで、気絶した時に見た夢を知っている。そして、頭痛で苦しんでいることを、いや、そうじゃなくて、“頭痛で苦しむ”ことを知っていたのか？

その通りだった。ぼやけた、曖昧な記憶の中を泳ぐ。全ての記憶が霧のようなフィルターに隠されて、思い出そうとしても、思い出せない。その中に少しだけ、印象に残っているものがあつた。

大きい、巨大な。人の形をした。でも、人間じゃない――。

――知っているだろ？ 巨大ロボットの話――。

ふざけるな。そんなはず無い。なんでそんな空想上の話が。

違う。目の前にいるのは、姉さんじゃない。こんな馬鹿げたことを言う人間じゃなかった。確かに不気味な印象で、物静かで、喋ることもあんまりないし、料理も下手糞だけど、人を脅すような態度を取る人間じゃない。第一、ただの会社員のはずじゃないか。それがなんで、目の前で……。

「見たよね？」

そうか、これはただの夢なんじゃないのか？ だからこんな非日常的な状況に陥って、自分は――。

心の中で、『これは夢だ』という自分と、『紛れもない現実だ』という自分がぶつかり合う。だが、すぐに『現実』だということに気づいた。『怖い』『逃げ出したい』という気持ちが頭の中で渦巻き、今いる場所が現実であるということを非常にも知らせている、言葉を失い、怯えるようにたじろぐ。

「――な、なにを」

「妖精」

微笑む、というより口元を微妙に緩めたといったほうが正しいのだろう。結子が真琴の目を見て呟く。

「私と一緒にこれば、少なくとも頭痛は治るし、疑問も解消する。」

色々説明する事だつて出来るし、なにより、あなたは私と一緒に来る必要があるわ。絶対に」

まるで、心の中を覗き見されているような、虚無感に襲われた。

「……行きましょう。言っておくけど、拒否権は無いわ」

真琴の二の腕を握り締め、きびすを返して歩き始めようとした。

「……ちよつと待つてください」

どこからか男の声がした。

「彼は今体調を崩していますし、それに、政府の用件であるという証拠を出していただかないかぎり、大切な生徒を引き渡すわけにはいきません」

学校の養護教諭だった。結子と似たような白衣と服装だったが、印象がまるで違う。

黒縁の眼鏡の奥、その目が疑いを隠しきれていなかった。

「……確かに、貴方の言う通りです。しかし、私も機密を守って行動する必要があります。残念ながら、お答えすることは出来ません」

「……真琴君、借りていきますね」

そう言うと、結子は真琴の腕をきつく握り、引きずるように、出入り口に向けて歩き始めた。養護教諭はなにか言いたそうであったが、周りの教師に促され押し黙ってしまう。

生徒の喋り声と、二人の友人の声だけが耳に残った。

episode? 4・王国の始まり?

4・王国の始まり

同日・午後十二時三十五分 天津第七

飛行場

日本に、それも京市にヨトウンが向かってきている。

確認されたのは日本時間で午前十時。最短到達時間は五時間と推測されている。同日十二時三十分には防衛省から指揮権が譲渡され、緊急の対策として、予備登録のなされていた芳永真琴を、パイロットとして緊急召集する。

司令室から送られてきた電文には、確かにそう書かれていた。

「最悪、最悪のタイミングだね。よりもよってこんな時に」

飛行場のハンガー。地上に降り立ったクレードルの中、通信機器の前でタバコを吸いながら津田が悪態をついた。

陝西省で活動していたヨトウン、総勢五体。その全ての破壊を終えて、クレードル二機は天津第七飛行場に戻ってきた。そして、御剣達の到着を待ち、数時間後には日本に向けて飛び立つはずだった。それで今回の作戦は終了するはずだったのだ。

それなのにこれだ。日本に、それも京市にヨトウンが迫っている。まともに運用できる戦力は中国の山西省を移動中で、どう足掻いてもヨトウン襲来に間に合わない。しかも、迎撃に向かわせるのはろくな訓練もしていない高校生ときた。

まさしく、一世一代の大ピンチと言ったところであろう。事実、京市にヨトウンが襲来するというのはこれが初めてのことだった。

ヨトウンは海中を移動できないものだと思われていたのだ。それ

は海中に現れなかったことや、被害がアメリカ大陸やユーラシア大陸に集中していたことも起因している。海上を移動できる個体も存在はしていたが、行動範囲は浅瀬に限られ、いずれにせよ、島国には来ないというのが一般的な認識だった。

だが、ヨトウンは海中から、確実に日本に向かってきている。

「そうカッカするなよ、津田」

いつの間に近づいていたのか、津田の後ろにコーヒークップを持った男性が立っていた。

黒の輸送機の操縦士、津田が搭乗していた一号機のパイロットだ。今は休憩しているのだろう、普段着用しているパイロットスーツはチャックの部分がだらしなく開いている。カップに入ったコーヒースをすすり、壁に凭れ掛かっていた。

「ここからどう急いだって日本に到着するのは何時間もあとなんだ。クレードルの補給や整備もあるし、健吾や梓を回収して積み込む必要だってある。お前が焦ったところでなんの解決にもなりやしないだろ？ 素直に新入りに任せなつて」

「そんなこと分かってるわよ。けど、普通の高校生がいきなり戦えるはずないでしょ？」

「んなこと言ったら健吾も梓も奈々ちゃんだって、全員似た境遇だろうに」

「そうだけど……。今回はあまりにも急すぎるでしょうに」

このまま戦って破壊できるほどヨトウンも甘くはない。奴らはこれまで多数の人間を殺してきたし、圧倒的な敵であることには変わりないのだ。素人が戦ったところで、どうにかなる問題ではない。最悪、殺されてしまう危険性だってある。

ヨトウンは、例え対等以上の戦力を持っていたとしても対処のしにくい相手なのである。

「だがなあ……。どうしようもないことには変わらないぞ。こっちだって精一杯頑張ってるけど、それでも間に合わないんだから」

「……ホント、最悪だわ」

そうなのだ。ここで悩んだところでどうにかなる問題でもないし、津田が出来ることといえば、二人が合流するのをじっと待っていることぐらいしか出来ないのだ。モニターをじっと眺めたところで二人が加速するわけでもないし、本当に、出来ることは限られている。祈ることくらいしか出来ないだろう。

（――全く。結子の奴、正直に喋ればよかったのに……！）

友人であり、仕事仲間である女性の顔を思い浮かべる。今回出撃する真琴という少年は、その友人の弟だったからだ。直接姿を見たことはなかったが、友人から話くらいは聞いている。学校――おそらく避難が完了した後のためシエルターにいるだろう――へ迎えに行くのも結子の役割のはずである。とにかく、なんとしてもヨトウンを破壊してもらいたいものだった。

「……ハア、なんで人様の家族関係で私がこうも悩まなくちゃいけないのかしら」

「知りませんがな」

男が別のコーヒーカップにコーヒーを注いで持ってきた。氣を利かせたのだろう、津田の目の前にカップを置く。

「ありがとう」

溜息をつきながら、目の前に置かれたコーヒーカップに手を伸ばす。湯気でレンズが曇るのを懸命に防ぎながら、ほろ苦いコーヒーを口にした。

両親が亡くなったのは、8年前の、2012年の秋だった。海外のどこかでひっそりと死んだらしく、関西に住んでいる親戚に預けられていた真琴は、親戚からの会話でそのことを知った。

悲しくはなかった。仕事の都合で多忙だった両親を、真琴は見たことがなかったからである。少なからず一緒に生活したことはあるのだろうが、記憶には残っていない。写真すら残っていなかったように、姿を見ることがすらできなかった。

姉である結子が就職したのは、ちょうどその頃だった。血の繋がった、唯一の家族が就職したということで、親戚一同は真琴と結子と一緒に生活することを望んでいた。結子もそれを強く望んでいたらしく、小学校を転校する形で七歳の頃に京市へと来た。

それから8年、二人での生活は続いている。といっても、結子が生家へ帰ってくる時間は遅く、食卓を囲むこともそう多くはないのだが。

だが、少なくとも、二人は家族だった。

車に乗ってから、どれくらいの時間が経っただろうか。少なくとも、三十分以上は経過しているだろう。エンジン音が車内に響き、小さな振動がシート越しに体に伝わる。古い車のため、なんとなく振動が激しく感じる。姉がこんな車を所有しているのも知らなかったし、現代の車とは全然違った特徴に、真琴も内心驚いた。

信号が全て止まっているため、法定速度は既に超えている。高速道路で出すような速度で、後々問題になるのでは？ と真琴は思ったが、大丈夫なのだろうと自然に思った。

普通ではない。姉も、それに関わってる、なにか大きな企業、組織――。

それに、まるで自分の心を覗き見たような言動。

聞かなければならない。一体、自分の周りになにが起こっているのかを――。

車に乗り込んでから一度も口を開いていないことに、焦りを感じたのもあるだろう。少しでも考えたところで、真琴は思い切って結子に聞いてみることにした。

「――なんで、俺の体調や、夢の内容が分かったんだ。それに、それが治るって言ったよな。聞きたいことだって山ほどある。なんで、こうやって自由に動けてんだ？」

窓の外の、流れるように過ぎていく、街の景色を眺めながら口に

出す。運転席で黙々と運転をしている結子は、目線だけをこちらに向けると、

「話さなくちゃいけないわね。今まで黙ってたことも、話せなかったことも」

強くハンドルを切り、路地のカーブを曲がる。長い直線の道路に出ると、浅く息を吸い、ゆつくりと語り始めた。

「――2005年の、……それよりも前、2000年。だから20年前になるわ。当時のニースでは全く触れられなかった事だけど、その当時、アラスカの奥地で一つの新種の生命体が発見されたの。始まりは、現地住民が狩りをしている時に偶然見つけたことだった。世紀の大発見っていうのかしらね？ その生物は、人間以上の技術力を知っていた。それが各国に伝わって、数々の研究者がその生命体を調べるためにアラスカへ向かったの。」

アラスカ――。かつては広大な自然が広がり、多数の部族が生活を営んでいた、遺産とも言える大地。国立公園や自然保護区が多数存在していたこの地は、現在は大量のヨトウンの巣窟となり立ち入りすら出来ない状況になっている。これは世界中でも珍しい状態であつた。

「知的生命体……地球外生命体って、ことが……？」

「それが宇宙から来たことは分からないわ。もしかしたら、はるか昔からこの地球にいたかも知れないわね」

「……………」

「研究者達は様々な技術――それも私たちの科学力では到底思いつかないような、画期的な技術をその生命体から得ることが出来たわ。特に軍事技術に連なる、科学技術のね……」

狭い路地を抜けて、商業地へと向かう大通りに出る。

「それから五年後のことよ。時の冬と呼ばれる、現象が世界中で起こったのは。合わせるようにヨトウンも現れて、研究はおじやん。ヨトウンが大量に現れたアラスカは完全に封鎖されてしまったわ」

「——『ヨトウン』？」

「……ああ、日本じゃその呼称は使われてなかったわね。あの生命体の名前だと思ってくれていいわ」

ヨトウンという名は、元々北欧神話に出てくる霜の巨人が由来だ。超人的な力を持つ巨人というのが一般的なイメージで、最初にヨトウンが現れた地域が北欧諸国だったために付けられている。

日本では神話から名付けられたことを不快に思う人間がいるらしく、この呼び名はあまり知られていなかった。

「——とにかく、時の冬のせいで研究データの大半は失われて、研究者達もそのほとんどがヨトウンに殺されてしまった」

重苦しい空気が車内を漂う。ニュースにもなっていない、それこそ一般人は絶対に知らない、暗澹とした事実。知ったばかりの事実だったが、死んでいった人達のことを思うと胸が詰まる。

例えば、その災害で25億もの人間が死んでいるのだ。姉である結子も、時の冬を経験している。現在世界を支えている人間は、全員が時の冬を経験した被災者なのだ。

「生き残った研究者達がデータの復元に努めたけど、その全てを元に戻すことは出来なかった。結局、手元に残ったのは現代科学の延長線に位置する物だけ……」

「——ちよつとまってくれよ。ここまで話したことは時の冬と生命体——ヨトウンに関係する事で、俺の事とは全然関係無い話じゃないのか？俺が聞きたかったのは、……姉さんが何者なのかと、なんで俺が連れ出されているかってことなんだけど」

話がそれているような、そんな気がした。事実、ここまでの出来事に真琴はなんら関係が無かった。結子がなにを言いたいのか、掴めない。

「まあ、分かりやすく言うと。私達は『復元されたデータを使ってヨトウンを破壊する、正義の味方』ってところかしらね」

「……っで、俺が必要な理由は？」

「そうねえ……正直口で説明しようとしても上手く言えないことだ

し、出来れば目的地に着いてからの方がいいんだけど」

「——めんどくせえ……」

重要なことは教えてくれそうになかった。というよりも、この場で教える気はもとよりないのかもしれない。どっちにしろ、行ってみないと分からない、ということなのか。

「……腹減った」

そういえば、昼食を食べていなかった。愛しの焼きそばパンは私物諸共シエルター内に取り残され、もしかしたら岩崎に食べられているかも知れない状況だ。食べておけばよかった、後悔しても遅いけど。

「見えてきたわ」

結子がそう言い、ある一点を指差す。

商業地へと向かう長い道路、その先に、地下へと続く巨大な口が存在していた。それは商業地へと向かう地下トンネルへの入り口で、市民もよく利用する、普通のトンネルのはずだった。

「あそこから、組織の本部に入ることが出来るの」

アクセルを踏み込み急加速。左手でシフトチェンジをしながら、

結子が言った。

「——組織……？」

「ラスク。この都市を拠点として活動している、『ヨトウンを壊すことの出来る正義の味方』よ」

さっきのフリーズが気に入ったのか、真琴の顔を見つめながら結子が呟く。

結子の運転するNSXが、地下トンネルへと向かう。トンネルの電灯は結子を通ることを分かっていたようで、いつもと変わらずトンネル内を照らしていた。

episode? 4・王国の始まり?

車がトンネル内へと入り、オレンジ色の明かりで視界が包み込まれる。入った途端にエンジン音が内部で反響し、車内はいっそう騒がしくなった。

反響したエンジン音は思ったよりも頭に響く。話す分には影響は無かったので、先ほども少し大きめの声で結子に喋りかけた。

「京市を拠点にしてるって、地下にでも……存在してるのかよ」

「大多数の施設は地下にあるけど、この都市その物が ラスク だと考えてもいいわ」

「どうということだ？」

「京市自体が ラスク の所有物ってこと。一応神奈川県由市にはなってるけど内部事情を考えたら、ここは国連とも相対することが出来るんだから。あくまで都市としての形を取ってるだけ。簡単に言えば、この都市そのものが施設というこのなの」

“そういう”組織は地下でひっそりと活動しているというのが真琴の見解だったが、どうやらこの組織—— ラスク は事情が違うようだ。その言葉がどこまで本当なのか未だ疑問が残るが、大規模な組織であることは間違いないのだろう。

だが、『国連とも相対することが出来る』という言葉は本気なのだろうか？ 一つの組織で世界と相対するなど、素人目にも不可能だと思える。なにか大きな自信であるのか、力でもあるのか——。

「……マジかよ」

自分が考えていたものよりも、規模があまりにも大きすぎる。

「ということは、京市は、……その ラスク のためだけに造られた都市ってことか？ カモフラージュのために、わざわざ初めから造り上げた、偽装のための都市。そういうことなのかよ」

「そういうわけじゃない。京市は 時の冬 やその他の大災害から人を守るために造られた、正真正銘の『要塞都市』であって、私達

が言う『要塞都市』とは、根本的な成り立ちが異なるわ」

「……つまり、どういうことなんだ？」

「双方の思惑が合致して、こういう体制になっているのよ」

結子がそう説明したところで、突然車が速度を落としてトンネル内で停車しようとする。

「——ここは……まだトンネルの中じゃないか」

窓から公衆電話、非常口と誘導灯が見える。ただそれだけだ。扉らしき扉も存在せず、普通の非常駐車帯と変わらない光景が目の前に広がっていた。

「なんでこんなところで停まるんだよ？ ……っ！？」

真琴が言った瞬間、突然車が『ガクンツ』と揺れ、地面へと沈んだ。車だけではない、非常駐車帯の部分がそのまま沈み込んでいるのだ。それもかなりの速さで、地下へと向かっている。

目を丸くしている真琴を見て、結子が微笑を浮かべながら説明した。

「凄いでしょ？ これはあくまで緊急の下降用エレベーターだけど、他にも色々な形の入り口があるわ。人間用の小型の物から、大型の物までね」

窓ガラス越しに、なにかの注意書きや矢印マークが見える。側面から露出する大小様々なケーブルや鉄製のプレートは、それほど年月が経っていないのか、まだ真新しい雰囲気を残している。工事現場で見る無骨なものでは無い。こういった部品その物が綺麗に、統一されて配置されていた。

「すげえ……」

真琴は思わず感嘆の声を漏らした。

揺れることも、軋むことも無くエレベーターは地下へと降りていく。それは数分ほど続き、数十メートルほど降りたところでゆっくりと下降する動きを止めた。

駐車場だった。コンクリートの素肌を晒す、とりたてて変哲もなただの駐車場。数百台の車が綺麗に並ぶ、普通の空間だった。し

かし、こんな広大な空間がトンネルの下にあるとは、普通の人間は知る由も無いだろう。

車が再び走り始め、駐車場内をゆっくりと進む。やがて小さなドアが見えてくると、駐車スペースに移動し結子は手早く車のエンジンを切った。途端にエンジン音が消え、駐車場内が一瞬で静まる。

「着いたのか？」

「ここは駐車場だけだね、到着よ」

結子がドアを開けて外に出た。それに続いて、真琴も外へと出る。どこから入ってきているのか、肌に触れる風はかなり冷たい。勢い良くドアを閉めると、軽い破裂音が駐車場と頭に響いた。

「付いてきて。時間には余裕があるけど、説明しないこともあるからね」

車の鍵を掛けながら結子が言った。施設内へと続いているのである。車内から見えたドアへと歩き始める。真琴は結子の背中を見つめるように後を追った。

安っぽい、緑色の塗料をそのまま塗りたくったようなドアだ。汚れが一切付いていないところを見ると、塗られてからそれほど時間は経過していないのだろう。同様に周囲のコンクリート壁も汚れていない。

結子がドアノブを捻ると、鈍い音を発しながらもゆっくりとドアは開いた。

照明の光と、白一色に塗られた通路が目に入る。漏れ出した空気は駐車場ほどは冷たくなく、むしろ生暖かい。

まるで、病院のような空間だった。だが、ここは病院以上に静かでキレイすぎる。『B2 第三駐車場』と書かれた標識を見つけはしたものの、それ以外に装飾品の類は見受けられない。誘導灯や案内板も存在はしているが、やはり取り立てて目立つものではなかった。照明の光が通路全体に鈍く反射して、白一色の空間をさらに際立たせている。

不自然なほどの綺麗さに、真琴が一瞬怯む。白一色のせいなのだ

ろうか、平衡感覚が失われ、遠近の区別が付かなくなる感覚がする。頭の中を静電気走ったかのような痛みが襲った。

ここから見る限り、人の姿は見えない。偶然なのか、人自体が存在していないのか。

「こつちよ、付いてきて」

結子が歩き始める。真琴は結子に付いて歩きながら、辺りに人がいないか探し始めた。

結局、通路を歩いている間、人の姿を見ることはなかった。

結子はその足を止めて、廊下と同じ様に白く塗られた扉の前に立ち止まる。『待機室』という簡素な標識が付けられた扉を結子が開ける。

「入って」

結子に促され、先に室内へと入る。廊下と同じ様に白の空間は、家具などが置かれていたため幾分か立体的に見える。不自然に綺麗なには変わりがなかったが……。

一人の男が、中央の椅子に腰掛けていた。知らない人物であることには間違いない。ここまで誰一人として人には会っていないかったためか、一瞬、真琴は声を掛けることを躊躇してしまった。

黒いスーツ姿の、細身の男だった。年はどれくらいだろうか、それなりに若そうな印象だったが、どこか老けているようにも見える。二十代にも見えないことはないが、三十歳後半にも見えた。

ワックスで整えられた髪に、強張った真面目そうな表情。どこか鋭さのある目は鳥類を思わせる。ただ、テーブルの上に置かれたティーポットと右手に持つティーカップはどうも男の雰囲気には似合わないかった。

立ち上がり、こちらへと向かってくる。身長はかなり高い、少なくとも結子とは10cmの開きはあるだろう。だから、自分よりも20cmは高い。長身で、尚且つキビキビした動きだ。

真琴が喋る前に、先に男の口が開いた。

「どうも、初めまして。私は、結子さんの上司の翁野裕樹というで

す。芳永真琴君だね？」

優しい口調に微笑。一見優しそうな人間にも見えたが、その立ち振る舞いは妙に怪しい。口調も、相手に合わせているような違和感。翁野と名乗った男は、真琴に握手を求めてきた。

「……どうも、芳永真琴です」

握手を求めてきたので、真琴も握り返す。しかし自然と警戒してしまう。

「よろしくね。……とりあえず座ってくれ。君もかなり疲れただろうし、お茶でも飲んで少しゆっくりしてくれ」

翁野が真琴の肩を持ち、椅子へと座らせた。翁野は近くの戸棚から新たなカップを取り出し、紅茶を注ぐ。

「結子君も座ったらどうだ？ 君も休んだほうが良い」

「遠慮しておくわ。そんな気分じゃないの」

カップに紅茶を注ぐ翁野が、扉の近くで立っていた結子を見て言った。が、結子は素っ気無い返事で断る。翁野はそんな結子を見て苦笑いをする。真琴に紅茶の注がれたティーカップを差し出した。真琴と向かい合うように椅子に座ると、再び紅茶を啜り始める。紅茶の苦味のある甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「——さて、真琴君。先ずは、君を無理やりここへ連れてきたことを謝罪するよ。頭痛だったり、シエルターでのやり取りだったり、負担を掛けさせてしまったね。こちらで配慮すべきだったと今は考えているよ。緊急だったとはいえ、流石にあの処置は急ぎすぎた。すまなかったね」

やはり、この人も自分の体調のことを知っている。多分、自分がなんで必要なのか知っているはずだ。

ここまでのやり取りで、ついに姉は自分がなんで必要なのか答えられなかった。長ったらしい出来事の話ばかりをするばかりで、聴こうとすれば『説明できない』と言って誤魔化すばかりだ。自分がなんで頭痛なのかも教えてくれず、ただこの場所へと引っ張ってきただけなのだ。

「翁野さん」

ここまで来たのだ、答えてもらわないと納得できない。
聴くのならば今だ。

「質問して、いいですか」

構わず、自分の思いをぶつけることにした。

「——俺がなんで連れてこられたのか、まだなに一つ説明してないじゃないですか。それじゃ、酷すぎると思います。それに、なんで姉さんが仕事を偽っていたのか、知らないはずの、俺の頭痛のことを知っていたのか。普通ここに来るまでに説明しないといけないんじゃないですか？……これじゃただの人攫いですよ」

翁野がチラリと結子に視線を向け、深く考え込むように手を組む。話すことを迷っているのだろうか、翁野は真琴の声を聞いてなにも言わなかった。

が、やがて決心したかのように顔を上げると、静かな声で喋り始める。

「……確かに、君の言う通りではある。隠していなければならなかったことも事実だが、ここまで黙っておくのもナンセンスだったかもしれない。当事者である君にこれ以上黙っておく必要は無いだろうね」

そう言うと、扉近くで立っている結子へと顔を向け、

「——どこまで話した」

「……時の冬の原因。ヨトウンの存在。組織の大まかな規模、それくらいです。根本的な部分は、なにも」

その言葉を聞いて、翁野が真琴を見てハッキリとした物言いでの喋り始めた。

「——結子君が、車内で言ったことは真実だ。そしてこの組織……ラスクの目的もその通りだ。即ち、私達はヨトウンを破壊するために活動している。結子君もこの組織の所属だ。私は、組織においてある重要な役職に就いている」

「……」

「元々は私達のミスが原因だった。本来ならば、君はそのまま高校生活を続けていたはずだ。我々の存在も知らず、ただ平凡に。今日君をここに連れてくることもなかっただろう。だが、最悪の事態に陥ってしまった」

「——ヨトウンの、ことですか？」

「その通りだ。私達の考えでは、ヨトウンはこの京市に来ることは無いと考えていたんだ。説明しようとすると思面倒になるが……ヨトウンは深い海域は行動できないと考えられていたからね。今まで日本列島にヨトウンが現れなかったのは、そのためなんだよ」

「……でも、ヨトウンは日本に向かってきているんですよね？　じゃないと、こんなことには——」

「それが問題なんだよ。奴らは現実に日本に向かってきているんだ。我々の予想を裏切ってね」

紅茶をすすりながら翁野が言った。その口調は戸惑いと焦りで語尾が強張っている。本当に予想外だったのだろう。どうやら、無理やり連れてきたのはそのためのようだった。

だが、どうにも腑に落ちない。ここまでの説明で大変な場面なのは理解できたが、自分を連れてきた理由も、頭痛を知っていた理由も説明されていない。自分が関わる必要性が分からないのだ。

「……というか、随分回りくどい言い方ですね。どこで自分が関係してくるんですか？」

そう真琴が言うと、翁野が目丸くしながら肩を竦める。

「……いきなり言ったところで、信じてもらえないと思った故の説明だったんだがね。どうやら君にはお気に召さなかったらしい。回りくどい説明は嫌いかい？」

「そうですね。知り合いに一人、そういうタイプの人間がいますから」

回りくどい説明と知略で周囲を巻き込み、お祭りごとが大好きな人間が一人、身近に存在しているのだ。そいつに毎回振り回された拳句、とんでもないことになる。ウンザリしたシチュエーションだ

った。

ただし、今回はそれよりも性質が悪いが。

「……分かった。では、話させて——」

翁野が答えようとしたその時、突然室内に『ピーッピーッ』という電子音が鳴った。

無線機の音だった。その音は翁野が着ているスーツの胸ポケットから鳴っている。

「どうした」

翁野は無線機を取り出して会話を始める。が、その顔がどんどん険しい顔つきになっていく。こちらには聞こえないよう小声で会話しているが、時折聞こえる息遣いには焦りが見え隠れしていた。翁野が結子に耳打ちをすると、やはり結子も表情を強張らせる。真琴は、ただ見ていることしか出来ない。

「——一緒に来てくれ。君に、見てもらいたいものがある。そこで全てを話そう」

椅子から立ち上がり、翁野が言った。

先ほどと比べて、随分と通路は騒がしくなったような気がする。それは自分たちが普段よりも早く歩いているせいでもあるのだろうが、通路自体が騒がしくなっているのもあるだろう。目や耳に入ってくる情報は、歩くごとに多くなっていた。

明らかに、周りから聞こえる音の量が増大しているのだ。駐車場付近の通路は空調が稼動する一定の駆動音が聞こえていただけだったのだが、今歩いているこの通路は、不規則な音が延々と耳に入ってくる。それだけではない、白一色のように見えた通路は徐々に機械的な装飾が増えて、無骨な灰色が面積を占めるようになっていく。施設の中心部、あるいは重要な部分に近づいているのは真琴でも漠然と分かった。エスカレーターやエレベーターに数回乗り継いでここまで来ているのだ。そう思わないほうがおかしいだろう。他に

も、いかにも堅牢そうな扉や、怪しげなカラフルな光源も見つけている。

しかし、どこを探しても人の姿は見当たらない。怪しい雰囲気の間違いは無かった。

「ここだ……」

先頭を歩いていった翁野が立ち止まり、こちらへと振り向く。立ち止まった先を見ると、電子ロック式の扉が目に入った。待機室の扉や駐車場の安っぽい扉とは全然違う形状だった。まるでSFに出てくるような、複雑な形をした扉だ。世界的にも最新式と謳われている、京市のシエルターの物よりも高性能に見える。ご丁寧に、扉の中央には R U S K の刻印まで彫られていた。

『第二ハンガー』と、標識には記載されていた。

「まるで、SFみたいな扉だな。……トンネルのエレベーターにも驚いたけど」

「——まあ、意味的には近いものかな」

翁野が真琴の言葉を聞いて囁く。

いつの間にか、結子が扉の前に近づいていた。どうやらセキュリティを解除しているようで、扉に設けられている機器を操作していた。

「真琴」

その結子が、突然真琴に声を掛けた。

「貴方、父さんと母さんがなにをしていたか知っていた？」

「突然なんだよ。なにか関係あるのか？」

真琴が知っている限りでは、両親は海外を飛び回っていたということだけであった。預けられていた関係で、仕事の内容は知らない。それが、今となにか関係があるのだろうか？

「いえ、なんでもないわ……開くわよ」

そう言って、結子は口を噤んでしまった。

扉から電子音が聞こえて、ゆっくりと扉が開き始める。隙間から漏れ出した光が体に突き刺さり、視界を真っ白に染め上げたように

も思えた。その中へ進んでいくと、目の前に広がる広大な空間から入ってくる空気が通路の空気を押し込めていくのが分かった。

凄まじい光景であったことは、確かだった。広大な空間の中にそり立つそれは、どう考えてもありえないものだったからだ。

「……なんだよ、これ」

ただ一言、真琴はそれしか呟くことが出来なかった。

まるでなにかの骨組みのようにも見えた。床から天井へと伸びていく二本の“足”は異様に細く、“太腿”と思われる部分だけが筋肉を貼り付けたかのように太い。“腕”も同じで、大きく膨らみのある肩から伸びる二の腕は足と同じくらいに細く、拳に向かう過程で太く形成されているようにも見える。

異常なのはその“胴体”だった。二個のパーツが斜めに繋がったようなその胴体は酷く頼りなく、今にも折れてしまうのではと思うほど脆そうで弱い。少なくとも脚と比べては頑丈そうには見えなかった、それでもなにかを支えるのには無謀ともいえる構造だった。頭部はここからはよく見えないが、異様な形であることには変わりないだろう。

ロボットだった。それも、異常にか弱い、骨組みのようなロボット。なんの素材か、半透明なパーツを纏った棒のような巨人。それが、この広大な空間の中心にそり立っていた。

空間の端には、先ほどまで仕事でもしていたのかつなぎ姿の作業員の姿が見える。二人以外で初めて見た人の姿だったが、目の前のロボットを見てしまった真琴は既に興味すら抱けなかった。

「——対ヨトウン兵器、とでも言っておきましょうかね。この人間は アームエルフ っていう名で呼んでいるわ」

「あ、あーむ、えるふ？」

腕……ではないだろう。だとすれば、武器、兵器の妖精だとも言うのだろうか。この細い、棒のようなロボットが、妖精であるか？

「これは、TYPE-01 アースガルズ。一番最初に開発されて、貴方を待っていた。十五年間、眠っていた個体」

「眠っていた？ …… なんで」

動揺しながら真琴が呟くと、翁野がこれ見よがしにと近づく。

「バイオナノマシン。それが アースガルス と、君の体内に存在しているからだ」

「ば、ばいおなのましん？ 体の中って、どういう——」

「——生物に近いなにかと言ったほうが手っ取り早いわね。ナノマシンの構成を限りなく生物に近づけた代物……。それがないと、エルフを動かすことは出来ないの。貴方は生まれた直後に、そのバイオナノマシンが投与された」

「君が発症した頭痛は、おそらくバイオナノマシンが脳に干渉したためだろう。何十年も活動をしていなかった結果、誤作動を起こした可能性が高い」

気絶した時に見た、今だハッキリとしない夢の内容。その内容が、まるで目の前に押し寄せる波のように、よみがえってくる。

あの夢の中で見た巨人は、このロボット——アームエルフだったのではないか？ あの時の自分の姿、“語りかけてきた”巨人の言葉。

——人ならざる者を切る矛となり、人と対なす楯となる——。

まさか、戦えというのだろうか。このロボットに乗って、ヨトウンを相手に。この自分が？ 京市を守る為に？

「……まさか、戦えって言うんですか……？」

「——30分よ、残された時間は。今すぐにも出撃しないと、間に合わない」

「真琴君。今、ヨトウンを破壊することが出来る戦力は君しかいないんだ。残念ながら、拒否することは出来ないだろう。君が出ないと、この都市は重慶のように壊滅する」

京市が、壊滅する。あの中国の街のように。自分が戦わないと大変なことになるというのだ。

悪い冗談だと真琴は思った。ただの高校生の自分が、京市のために戦えと言われるはずがない。素人なのだ、一度もこんなロボット操ったことはないし、見たこともなかったのだ。それをいきなり、戦えなどと。夢か冗談でしかないだろう。

戦うにしても、それは死に行くようなものではないのか――？

今まで感じたことの無い不安と焦りを感じて、顔が引きつる。目の前のロボットから離れるように後退り、腰が自然と引けていた。

「――無理ですよ、俺に、俺に出来るわけじゃないじゃないですか……」

「では、君は逃げるのか？ この場で戦えるのは君だけの状況で、友人や、街の人間を捨てて。私にはそうは見えない。君は戦う、そうだろう？」

「……………」

無茶苦茶だ。最初から選択肢は無いのだ。自分が戦うしか都市を救えないし、逃げてしまえば救えないのだ。代わりの人間はいない、自分がヨトウンを倒す以外に方法は無いということなのだ。

「もう一度言うが、君しか戦える物はいない。そして、拒否することも出来ない。都市レベル――。いや、国家レベルの危機なんだよ。サポートは約束する。来てくれ」

悩む余裕すら無い、そういう問題だった。

「……………なんでいつも、こんな面倒なことに巻き込まれるんだ……」

……。拒否することも出来ないなんて、馬鹿げてる」

今すぐにでも泣いてしまいたいほどだった。いや、もう泣いていたのかもしれない。

扉へと向かう二人を追いかけるため、真琴はトボトボと歩き始めた。

episode? 4・王国の始まり?

同日・午後二時十三分 中華人民共

和国

ヨトウンが出現してから、ここまでおよそ数十年という歳月が経過している。それまでに、ヨトウンの攻撃によって消滅した国家は実に数十にも及び、地理、国境なども幾度となく塗り替えられていた。中東では民族間の戦争がさらに激化し、国家同士の水面下での争いもその規模を大きくしている。とりわけアジアでは国家間の動向が世界にも注目されるまでになり、ヨトウンと同等レベルの問題とも称されるようになっていた。

まず、北アジア全域を領土とするロシア連邦は、ヨトウンの撃退を主とする軍事力の強化を掲げ、ここ数年で戦力を大幅に拡大している。その結果、アメリカ合衆国やイギリスなどがロシアに強く反発しており、特にアメリカとロシアは双方ともに威嚇しあう事となつてしまった。大きな動きは今のところ見られてはいないのだが、ここに来て冷戦再突入が懸念され始めている。

そして、東アジアの大国、中華人民共和国は 時の冬 とヨトウンの影響によって国力を大幅に失い、その力を損失するという最悪の状況に陥っている。時の冬 とヨトウンの攻撃によって死亡した人間は国内だけで6億人であり、当然この数字は世界第一位という、あまりにも不名誉な記録となっていた。労働力を失ったうえ、ヨトウンによって蹂躪された中国はその形を大きく変え、20世紀までの面影は消え去ったといっても過言では無かったのだ。

ここ、陝西省と河北省のほぼ中間に位置するこの一帯も、数年ほど前までは一つの省として存在していたのだ。今では木々と山々がただ存在するだけの、寂しい地形と化している。地図上からも名称

は消え去り、ただ名称無し区域として認識されるだけの状態だ。
このような区域が、中国にはまだ多数存在している。

——その結果、ここ中国は巨人——アームエルフを運用する最適の条件が揃っているのであるが。

『——ッ！？』

木々の間から突然人間が現れる。跳躍しようと加速していた巨人の足元に現れたその男を見て、御剣は瞬間的に手に持ったガルーダ——を地面に突き刺した。

それを支点として、一気に横へと流れ飛ぶ。踏みつける直前に気づけたことから、なんとか回避することが出来た。

男は、まるで化け物を見たかのような驚き方でこちらを見ていたが、強ち間違いないだろう。そのうち、転倒しながらも逃げていった。

『……………』

（——だから、走りながらの帰還は嫌いなんだ——）

青の巨人——アームエルフ——を操る御剣健吾は、人知れず小さな舌打ちをした。

良い思いをするわけが無い。今みたいに人には見られてしまうし、最悪踏みつけてしまう可能性もあるからだ。それ以外にも、車や住宅を踏み潰してしまう可能性は十分ある。その場合、人は即死だ。自分は人を殺してしまったということになる。

幸い、それまでにそんな出来事は無かったが……というか、このような強引な手段で帰還することも滅多に無いのだが。

このような強引な手段で帰還できる国は、良くも悪くも中国くらいなのだ。大抵ヨトゥンとの戦闘が終わりに帰還しようとする、周囲の人の目を気にしてデリケートな作業になるのだが、今だ情報統制や格差が目立つこの国ではアームエルフを見られても公になる可能性は低い。国側で徹底的に情報を抑えているのもあるのだが、

時の冬　で人口が激減したのが最も大きな要因だろう。ともかく、中国の全面的な協力（というにはかなりくどいやり方なのだが）によって活動が成り立っているのは事実だった。無論、なにをしてくるかは分からないので、ある程度の距離を保ってはいはいるのだが。最も、見られているのは変わりないので、徐々に存在が明るみになっているのは間違いない。それはどの国でも同じなのだ。

目の前に、巨大な山々が見えてくる。深く身を沈めて跳躍。それだけで、複数点在する山は小さな粒となって視界から消えていった。体を切り裂くように風が撫でて、押し上げてくる突風が不規則に姿勢を狂わせた。

なんということもない。強引に姿勢を元に戻して、迫る地面に着地する。そうすると、盛大に砂埃が舞い、土塊が飛び跳ねた。重苦しい衝突音も鳴る。

随分派手な行動なのだが、距離を稼ぐにはこれが一番の方法なのだ。下手に走るよりも前に向かって跳んだほうが動作も少ないし、尚且つ速い。近くで見たのならかなりの迫力があるだろう。最も、確実に人がいないところでないか、とんでもないことになるのだが。『——いいいい……やつほおおおおッ！！！！』

まるで、なにかが墜落したかのような爆音と、子供のような叫び声が後ろから聞こえた。

守下梓だった。緑色の巨体が、砂埃と土塊を纏いながら追走してくる様子が一瞬目に映る。両肩から垂れるプレートが、スタビライザーのように稼働しているのが見えた。

『ふう、ヤッパ楽しい！！　御剣ー、もっかい飛ばうよ！！！！』
空を指差しながら近づいてくる梓のアームエルフ。その姿を見て、ふたたび御剣は舌打ちをした。

梓の叫び声は周りに聞こえることは無い。アームエルフには外部との会話を目的としたスピーカーが内蔵されているが、基本的にその電源はカットされている。操縦者の声が部外者である人間に聞こえてしまうということは、最悪アームエルフの操縦者が誰であるの

が特定されてしまうからだ。よって、スピーカーはなんらかの問題が発生した場合のみにしか使用されないのである。

そのため、各アームエルフの会話は単純な通信によって行われている。どれだけ叫ぼうともはしゃごうとも、それは同じアームエルフの操縦者が関係者にしか聞こえていない。

……が、御剣にとつて拒むことの出来ないこの通信は、ただただうつとおしいだけなのである。

原因は勿論、彼女——守下梓にあるのだ。

都合上、御剣は彼女と共に戦闘を行うことが多い。それは満足に行動できる戦力が自分達以外にいないということもあるのだが、梓自身が御剣との協同を望んでいることも大きい。

昔から一緒に生活していたということもあってか、彼女はいつも御剣に頼りすぎな節がある。依存症とでも言うべきか、とにかく御剣と行動したがる。勿論、年相応に自立した面もあることはあるのだが。

そのためか、梓は作戦中でも御剣と会話しようとする。

だが、その会話というものが二人の間では成り立たないのである。梓は作戦中、よく叫ぶ。錯乱状態に陥ったように、ヒステリックな叫びを上げる。別に普段から叫んでいるわけではないが……戦闘中の声はほとんどが叫び声なのだ。特にヨトウンと戦っている最中は叫び声に笑い声が合わさり、とんでもないことになる。

そのため、作戦中は常に梓のヒステリックな叫び声が頭に響いているわけである。

『ねえねえ御剣ー。次はあそこまで競争しようよー！』

緑の巨人——梓のアームエルフが御剣の前に躍り出て、遠くに見える小さな丘を指差して言った。

『……なんでだ』

『だって退屈じゃーん。ただ走って帰るだけだつまらないでしょー？』

『人を踏む危険だってある。お前、人殺して責任取れるか？』

『むっ……。その言い方、気に入らない。そりゃ責任は取れないけど……』

『大人しくしておけ』

『エーッ』

戦闘中の狂気に満ちた声と比べ、例えば帰還の最中であるとか、ヨタウンが見えない場所ではこのように無邪気な声色で喋る。性格の変動は致し方ないとはいえ、それにしても激しすぎると御剣は思った。

性格が大きく変わるのにも原因はある。体内に投与された、アームエルフを操縦するためのバイオナノマシンが脳に影響を与えるため性格が変動するのである。根本的な思考には全く問題ないので、一種の作用と考えればいいことなのではあるが。

梓はその影響で、普段の強気で年相応な性格から戦闘時は子供っぽく、狂気的な性格に変わるのだ。御剣は一変、口数が少なくなり、冷静な性格になる。津田によると、どこか余所余所しくもなるらしい。

御剣に注意された先行する緑のアームエルフは、つまらないといった風は無邪気に走り、「暇だなー」と言いながらスキップしている。そして、その巨体を器用に動かして宙返りや二回転を軽々とこなした。

『……その動きを、戦闘に使えないのか』

『だってあいつ等、動き単調だしー。そこまで動く必要が無いもん』

そう言いながら、新体操選手顔負けの動作で御剣を追走する。当然、楽しそうに笑いながら、である。

『——まったく……いや、待て』

全力疾走していた御剣が、突然その足を止めて立ち止まる。後ろを同じ速度で走っていた梓は突然のことに驚き、危うく二人は衝突してしまうところだった。

『うわっと。どーしたのよ、止まるならハッキリ言ってよー！』

プンスカと頬を膨らませて梓が怒った。流石にアームエルフの頬が膨らむということは無かったが、怒る梓の拳動は再現する。ドンと、地面を踏みつけていた。

『……足元を見る。このあたりだけ地盤が極端に軟らかい。このまま行ったらお前、埋まるぞ』

おそらくは雨と、なんらかの衝撃でこの辺り一帯の地盤が掘り起こされているからだろう。中国はこれまでに何度もヨトウンを攻撃している。ここも、その爪痕が大きく残っている場所なのだ。

梓が指摘された通りに足元を良く見てみる。注意深く見るまでも無く、足がズブズブと地面に沈んでいた。それもかなりの勢いで、梓だけが。

見れば、この辺り一帯が泥のようになっていた。

『……お前だけ迂回するしかないみたいだ。重いから』

『な、なによー！？ 仕方ないじゃない、そういう風に造られてるんだから！！！』

両肩の長いプレート。地味なユニットであるのだが、実は片側だけで50t以上の重量を誇るのだ。また脚と腕、胴体は御剣のアームエルフよりポリウムがあり、重い。

御剣のものと単純に比べると、100t以上の重量の差があるのだ。

そのため、梓だけが、かなりの速度で埋もれていたのである。

『そんなこと言っている暇があったら、抜け出したほうが良いんじゃないか。目的地は同じだから、どの道置いていくけど』

そう言つと、御剣は梓を置いて先へと駆け出していった。梓を挑発するように、やけに軽い動作で。

『ちよつと、待ちなさいよー！！！ って、早く抜けださないと…』

…ああああ』

既に膝まで埋もれた足を両手で引っ張り、真上に跳躍しようとするの巨体をしならせる。が、どうにも上手くいかない。それどころか尻餅を付いて、盛大に泥が跳ね上がる。

結果として上半身にも泥が付いてしまった。

数分ほどしてようやく抜け出せたが、時既に遅し。御剣はかなり先まで行ってしまったようで、その姿は見えなくなっていた。綺麗な緑色をした装甲は、灰色に近い泥で薄汚れている。

『――帰ったらゆるさないんだから……！！！！』

沼地を迂回するため大きく左へと跳躍する。ちょうどその先は木々が生い茂り、沼地では無さそうだったからだ。天津だと忙しいだろうから、御剣を懲らしめるのは日本に帰ってからにしよう……と跳躍しながら梓が考える。そのためには、京市が無事でないといけない。

（――ああ、だけど――）

迎撃する、まだ見ぬアームエルフの操縦者。誰かは知らないが――

『死んじやうかもね、アースガルズの奴』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5646p/>

閃光のアームエルフ

2011年4月14日20時10分発行